

# 平安京右京五条三坊三町跡

2005年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

# 平安京右京五条三坊三町跡

2005年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所



1 建物4柱穴138(南西から)



2 建物4柱穴151出土壁土

# 序 文

京都には数多くの有形無形の文化財が今も生きています。それら各々の歴史は長く多岐にわたり、京都の文化の重厚さを物語っています。こうした中、地中に埋もれた文化財（遺跡）は今は失われた京都の姿を浮かび上がらせてくれます。それは、平安京建設以来1200年以上にわたる都市の営みやその周りに広がる姿をも再現してくれます。一つ一つの発掘調査からわかってくる事実もさることながら、その積み重ねによってより広範囲な地域の動向も理解できることにつながります。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、こうした成果を現地説明会や写真展、考古資料館での展示、ホームページでの情報発信などを通じ広く公開することで、市民の皆様へ京都の歴史像をより実態的に理解していただけるよう取り組んでいます。また、小学校などでの地域学習への成果の活用も、遺物の展示や体験授業を通じて実施しています。今後、さらに埋蔵文化財の発掘調査成果の活用を図っていきたいと願っています。

研究所では、平成13年度より一つ一つの発掘調査について報告書を発刊し、その成果を公開しています。調査面積が十数平方メートルから、数千平方メートルにおよぶ規模の違いはありますが、こうした報告書の積み重ねによって各地域の歴史がより広く深く理解できることとなります。

このたびマンション建設に伴う平安京跡の発掘調査成果を報告いたします。本報告書の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示たまわりますようお願い申し上げます。

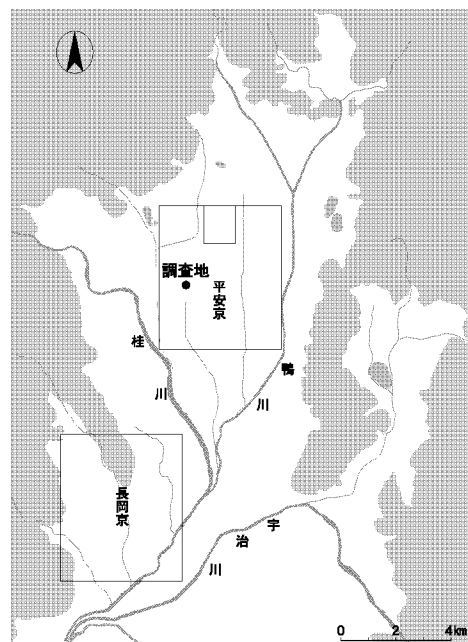
末尾ではありますが、当調査に際して御協力と御支援をたまわりました多くの関係者各位に厚くお礼と感謝を申し上げます。

平成17年6月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所  
所 長 川 上 貢

# 例 言

- 1 遺 跡 名 平安京右京五条三坊三町跡
- 2 調査所在地 京都市右京区西院矢掛町16・17番
- 3 委 託 者 小澤フサ枝
- 4 調査期間 2005年3月11日～2005年4月28日
- 5 調査面積 494m<sup>2</sup>
- 6 調査担当者 東 洋一・長戸満男
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「西京極」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 日本測地系（改正前）平面直角座標系（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用基準点 京都市が設置した京都市遺跡発掘調査基準点（一級基準点）を使用した。
- 11 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 12 遺 構 番 号 通し番号を付し、遺構種類を前に付けたが、建物・柵列・埋納遺構については遺構別番号を付した。
- 13 遺物番号 挿図の順に通し番号を付した。
- 14 掲載写真 村井伸也・幸明綾子・担当調査員
- 15 遺物復元 村上 勉・出水みゆき
- 16 基準点測量 宮原健吾
- 17 本書作成 土器類を小森俊寛、付章を北野信彦・竜子正彦、その他を東 洋一が担当した。
- 18 編集・調整 児玉光世・清藤玲子
- 19 調査現場において京都大学教授西山良平氏・花園大学教授山田邦和氏からは御教示をいただいた。壁土の鑑定には浅原雄三氏（京都府左官工業協同組合）石材の鑑定は李 永一氏（日本地学研究会）の御協力を得た。記して謝意を申し上げる。
- 20 本書は、2001年度から発刊してきた『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報』を今年度より書名変更したものである。



（調査地点図）

# 目 次

1 . 調査経過	1
2 . 遺 構	3
( 1 ) 基本層序	3
( 2 ) 遺構の概要	4
( 3 ) 溝	4
( 4 ) 掘立柱建物	4
( 5 ) 柵列・柱穴列	13
( 6 ) 埋納遺構	14
3 . 遺 物	15
( 1 ) 遺物の概要	15
( 2 ) 土器類	15
( 3 ) 壁 土	22
( 4 ) 木製品	23
( 5 ) 石製品	23
( 6 ) 瓦 類	24
4 . ま と め	25
5 . 付章 柱穴出土の壁土片の分析	27
( 1 ) はじめに	27
( 2 ) 壁土試料の分析	27
( 3 ) 小 結	29

# 図 版 目 次

カラー図版 1	遺構・遺物	1	建物 4 柱穴138 ( 南西から )
		2	建物 4 柱穴151出土壁土
図版 1	遺構		調査区全景 ( 東から )
図版 2	遺構	1	溝 2 ( 東から )
		2	建物 1 ( 北から )
図版 3	遺構	1	建物 3 ~ 5 ・ 8 ( 東から )
		2	建物 7 ( 北から )

- 図版 4 遺構 1 建物 1 柱穴174 (北西から)  
 2 建物 5 柱穴162 (北から)  
 3 建物 4 柱穴192 (東から)  
 4 埋納遺構 1 (北西から)
- 図版 5 遺構 1 埋納遺構 2 (東から)  
 2 南壁断面 火山灰層 (北から)
- 図版 6 遺物 建物 1 柱穴174・埋納遺構 1～3 出土土器
- 図版 7 遺物 溝 2 出土土器
- 図版 8 遺物 溝 1～3 出土土器

## 挿 図 目 次

図 1	調査位置図 ( 1 : 2,500 )	1
図 2	四行八門と遺構概念図 ( 1 : 1,000 )	2
図 3	調査区配置図 ( 1 : 400 )	2
図 4	調査前全景 (東から)	3
図 5	作業風景 (東から)	3
図 6	基本層位図 ( 1 : 40 )	3
図 7	調査区遺構実測図 ( 1 : 200 )	5
図 8	溝 1～3 実測図 (平面図 1 : 100、断面図 1 : 20)	6
図 9	溝 2 遺物分布状況平面図 ( 1 : 20 )	7
図 10	建物 1 実測図 ( 1 : 100 )	9
図 11	建物 2・3 実測図 ( 1 : 100 )	10
図 12	建物 4・8 実測図 ( 1 : 100 )	11
図 13	建物 5～7、柱穴列 1 実測図 ( 1 : 100 )	12
図 14	柵列 1 実測図 ( 1 : 100 )	13
図 15	埋納遺構 1～3 実測図 ( 1 : 20 )	14
図 16	建物柱穴・埋納遺構・土壌172出土土器実測図 ( 1 : 4 )	16
図 17	溝 2 出土土器実測図 1 ( 1 : 4 )	18
図 18	溝 2 出土土器実測図 2 ( 1 : 4 )	19
図 19	溝 1・3 出土土器実測図 ( 1 : 4 )	20
図 20	溝 1 出土土器実測図 ( 1 : 4 )	21
図 21	壁土実測図 ( 1 : 2 )	22

図22	石製品実測図（159～164は1：3、165～170は1：2）	23
図23	軒平瓦拓影・実測図（1：4）	24
図24	建物3～5・8変遷図（1：300）	26
図25	壁土・火山灰顕微鏡写真	36

## 表 目 次

表1	遺構概要表	4
表2	遺物概要表	15
表3	柱穴出土の壁土重量表	27
表4	蛍光X線・X線回折分析表	31
表5	粒度分布表	32
表6	火山灰分析結果表1	33
表7	火山灰分析結果表2	34
表8	火山灰分析結果表3	35



# 平安京右京五条三坊三町跡

## 1. 調査経過

京都市右京区西院矢掛町16・17番で京都市埋蔵文化財調査センターが試掘調査を行ったところ、現地表下約60cmで明黄褐色粘土の地山層上面に成立する平安時代中期の遺構・遺物などを良好な状態で検出した。そこで埋蔵文化財調査センターの指導により、(財)京都市埋蔵文化財研究所が発掘調査を行うこととなった。発掘調査は2005年3月11日より開始した。

調査地は平安京右京五条三坊三町にあたり、三町の東半中央部分に位置する。また1町内を区分する「四行八門制」では三町内の「東一・二行、北四・五門」の4戸主に該当する。鎌倉時代に作成された『拾芥抄』収録の「西京図」によれば、少なくとも平安時代後期から周辺部一円が摂関家所領の「小泉荘」となっている。

三町内の発掘調査は今回が初めてとなるが、周辺部の調査では平安時代前期から中期の遺構・遺物が検出されており、また弥生時代から古墳時代の西院遺跡にもあたる。市埋蔵文化財調査センターによる試掘調査結果と合わせると平安時代中期以前の良好な遺構の検出が期待された。

調査は現代層および旧耕土層を重機によって除去し、調査区全面に東西・南北に掘り込まれた耕作に伴う溝の調査から始めた。そして10世紀前半の遺物が多量に詰まった溝および平安京造営

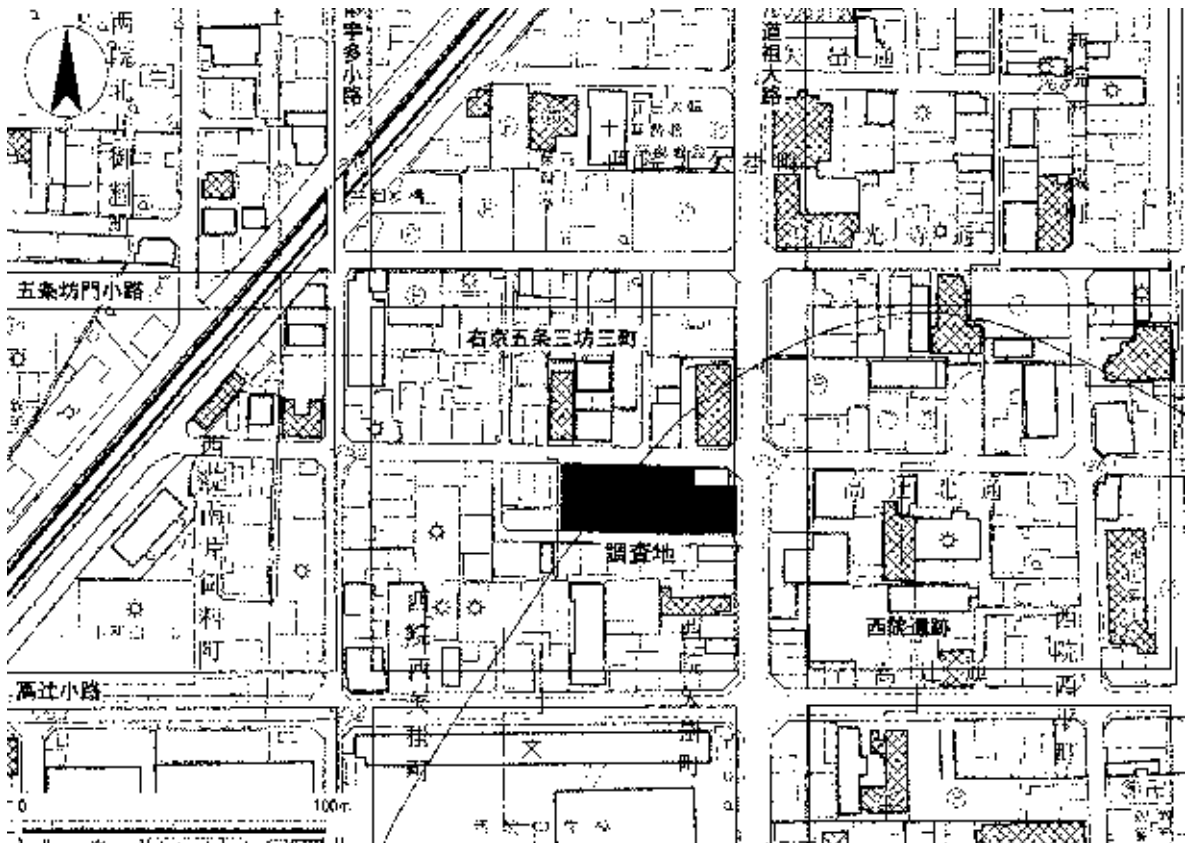


図1 調査位置図(1:2,500)

五条坊門小路

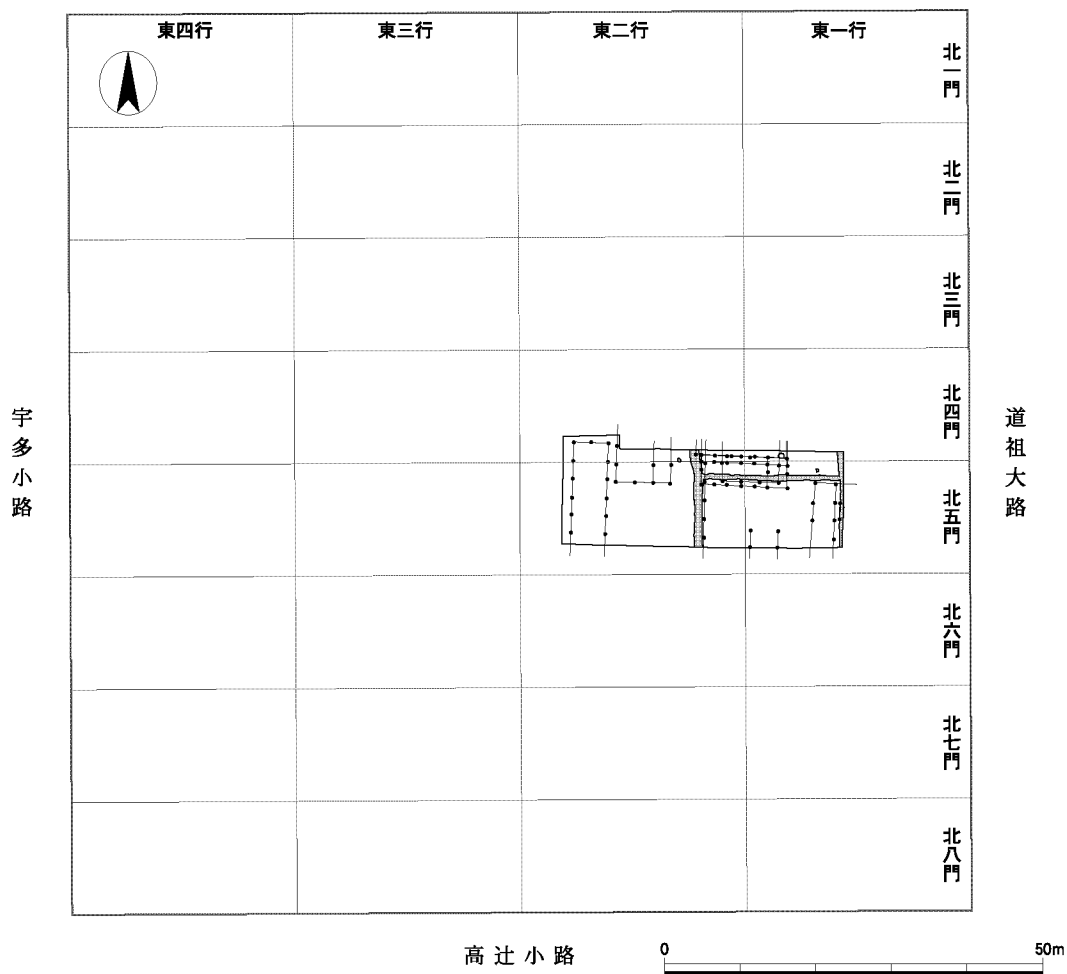


図2 四行八門と遺構概念図 (1 : 1,000)

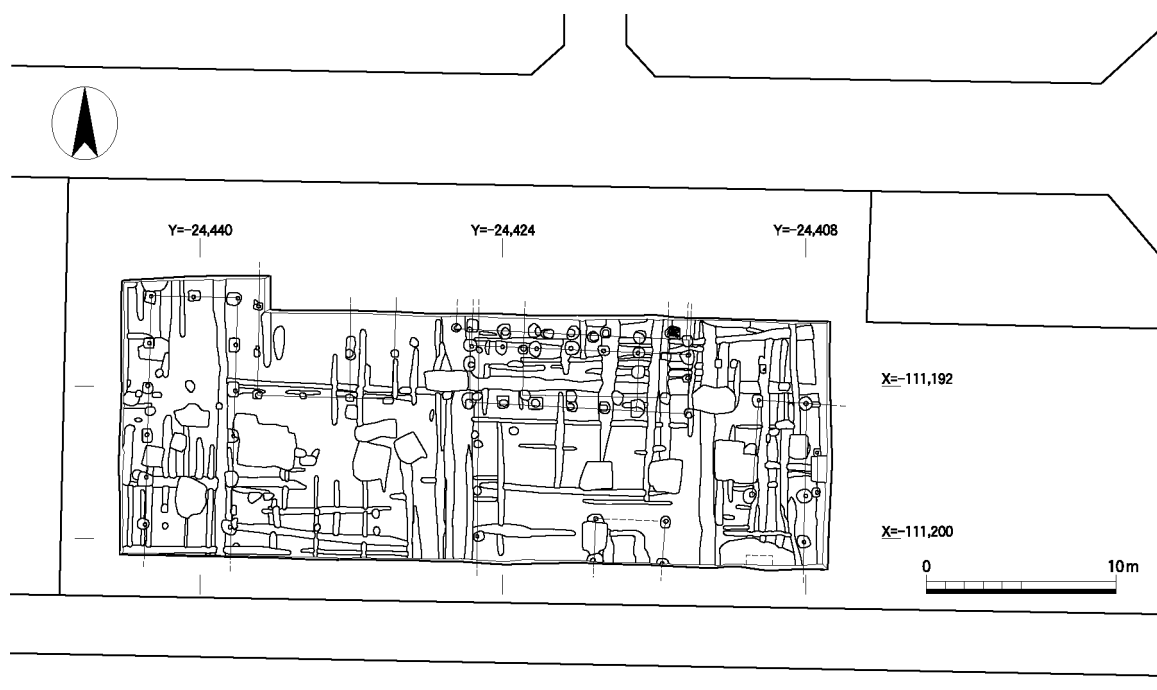


図3 調査区配置図 (1 : 400)



図4 調査前全景（東から）



図5 作業風景（東から）

期から10世紀前半の掘立柱建物8棟と土師器や円礫を埋納した遺構3基を検出した。

今回の調査は遺構の残存状態が良好で、宅地利用の状態がよくわかる好例である。そのため調査委託者の了解を得て4月16日に近隣住民を対象にした現地説明会を行い、成果の普及啓発に努めた。説明会には約300名の参加があった。

また断割調査では、現地表面下約1.8m地点で始良火山灰層を検出した。

4月28日に作業を終了した。

## 2. 遺 構

### (1) 基本層序 (図6)

調査地の基本層序は図6に示したように、すべての層がほぼ水平に堆積している。最上層の1層はコークスで約50cm嵩上げた盛土層。2層は宅地化される前の水田層で、3・4層は耕作層（畑か?）である。4層直下が地山層（7層）となる。5・6などの遺構すべてが地山層（7層）

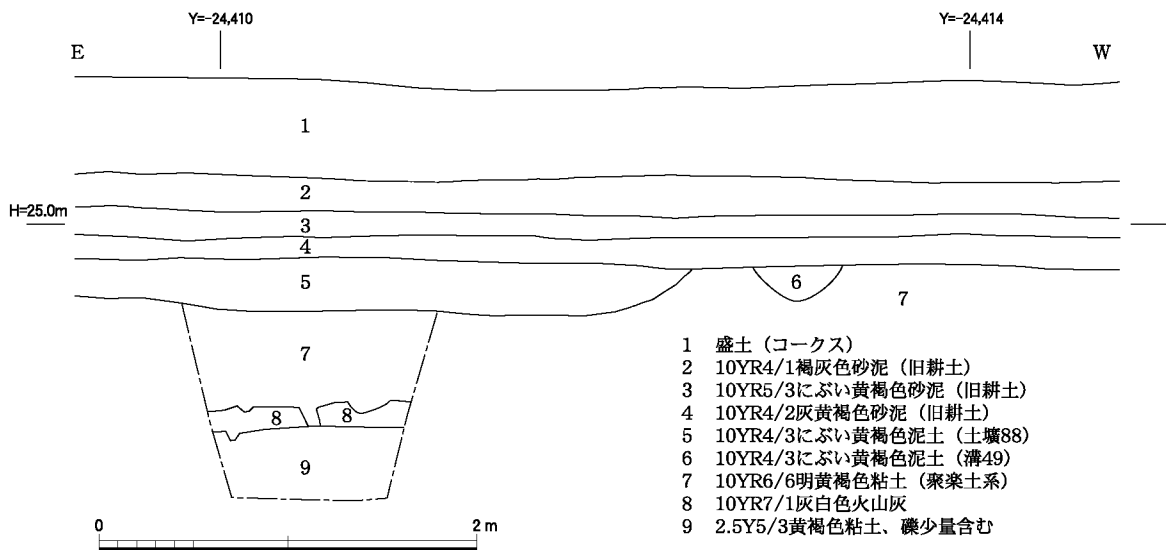


図6 基本層位図（1：40）

上面を切り込んで成立している。したがって今回の調査は地山層（7層）上面の1面調査となった。地山層（7層）は、いわゆる聚楽土系の明黄褐色粘土で、約80cmの分厚い単層の無遺物層である。地山層（7層）直下にガラス質を主成分とする灰白色の火山灰層（8層）が約15cm堆積する。この火山灰層は自然科学分析の結果、26,000～29,000年前に降り積もった始良Tn火山灰に同定できた（付章参照）。火山灰層（8層）直下の9層は礫を少量含む黄褐色粘土で火山灰が堆積する以前から湿地であった可能性が高い。

## （2）遺構の概要

今回検出した遺構は、10世紀前半以降に形成された耕作溝を除けば平安時代前期から中期に限定できる掘立柱建物8棟・埋納遺構3箇所・溝3条・柵列1列などを検出した。

## （3）溝

溝1～3（図8・9、図版2-1） 調査区中央から東にかけて、調査区中央で南北方向の幅約150cmの溝1、調査区東壁に沿った溝3、溝1・3を繋ぐ東西方向の幅約80cmの溝2を検出した。平行関係にある南北方向の溝1と溝3との距離は約20mである（図8）。これらの溝は便宜上それぞれに番号を付けているが相互に切り合いはなく同一期の溝で、埋土は黒褐色砂泥である。溝内には10世紀前半の遺物が多量に破棄された状態で検出できたが、遺物は溝1北半・溝2西半部に集中してみられた（図9）。溝の残存深が深い部分でも20cmほどなので遺構面は後世の耕作による削平を受けているものと思われる。溝1は他の溝より広くて深い。溝1は南端が北端に比べ約10cm深くなっており、南流していたものと思われる。また溝2は溝1との合流が東端より約10cm深く溝1に合流し、西に向かって流れていたと思われる。溝3は南がわずかに深く溝2との合流点では、ほぼ同一の深さであった。これらの溝の水流方向は、本来の地形傾斜が反映しているものと思われる。なお、溝1は次に述べる建物4・5・8の西妻側柱穴（152・151・163・210）を切って成立している。また、溝2は建物4の東妻中央柱の柱穴192を切って成立している。なお、この溝は「四行八門制」の推定ラインとは一致しない（図2）。

## （4）掘立柱建物

掘立柱建物は合計8棟検出した。建物4を除いてすべて調査区外に展開するので、正確な建物規模は不明であるが、柱穴の配置や建て替えなどを勘案すると、建物1・2・6・7は南北棟、

表1 遺構概要表

時代	遺構	備考
平安時代前期～中期	掘立柱建物8棟、埋納遺構3箇所、溝3条、柵列1列、柱穴列1列	
平安時代中期以降	耕作溝70条以上	

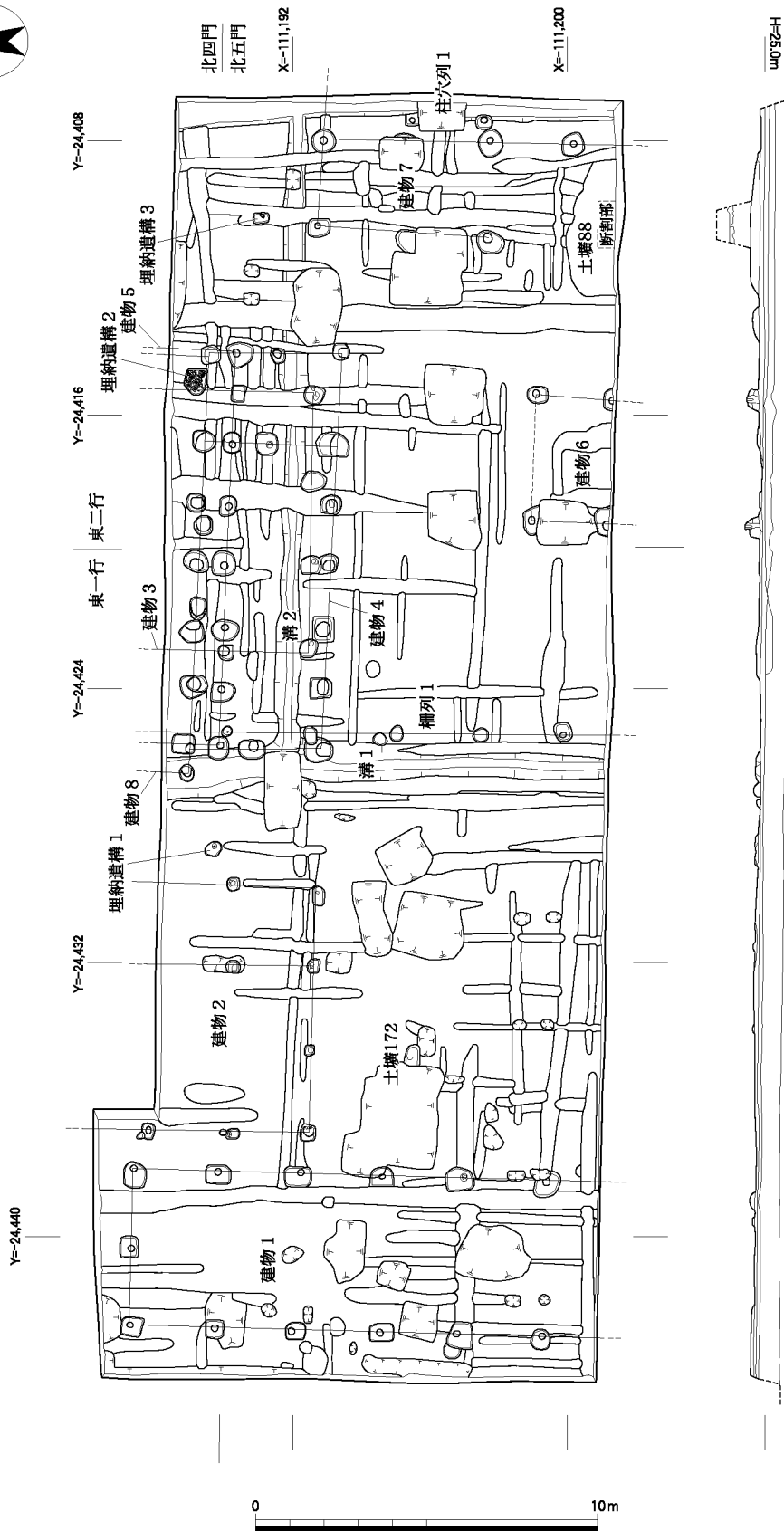


図7 調査区遺構実測図 (1 : 200)

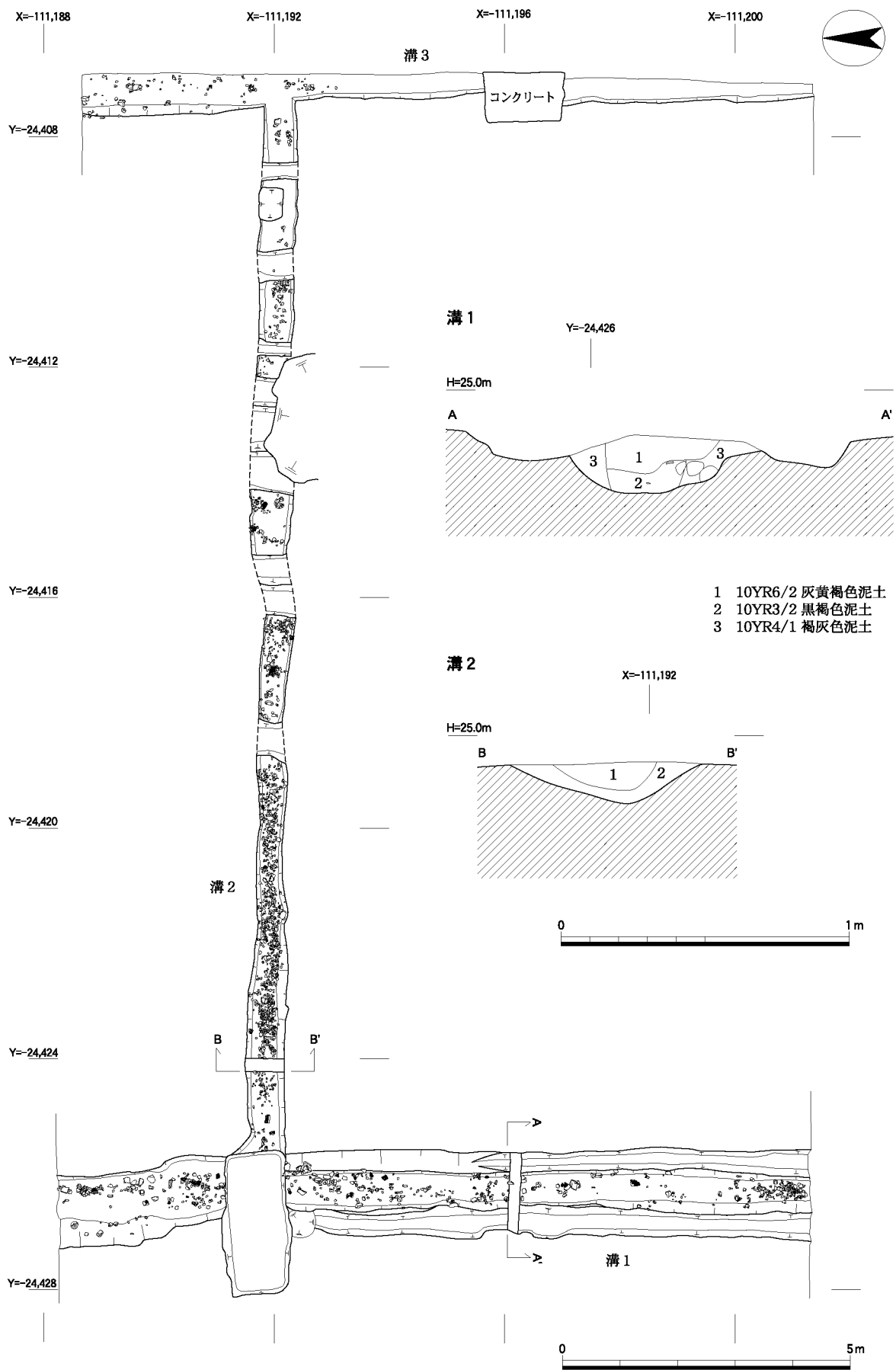


図8 溝1～3実測図(平面図1:100、断面図1:20)

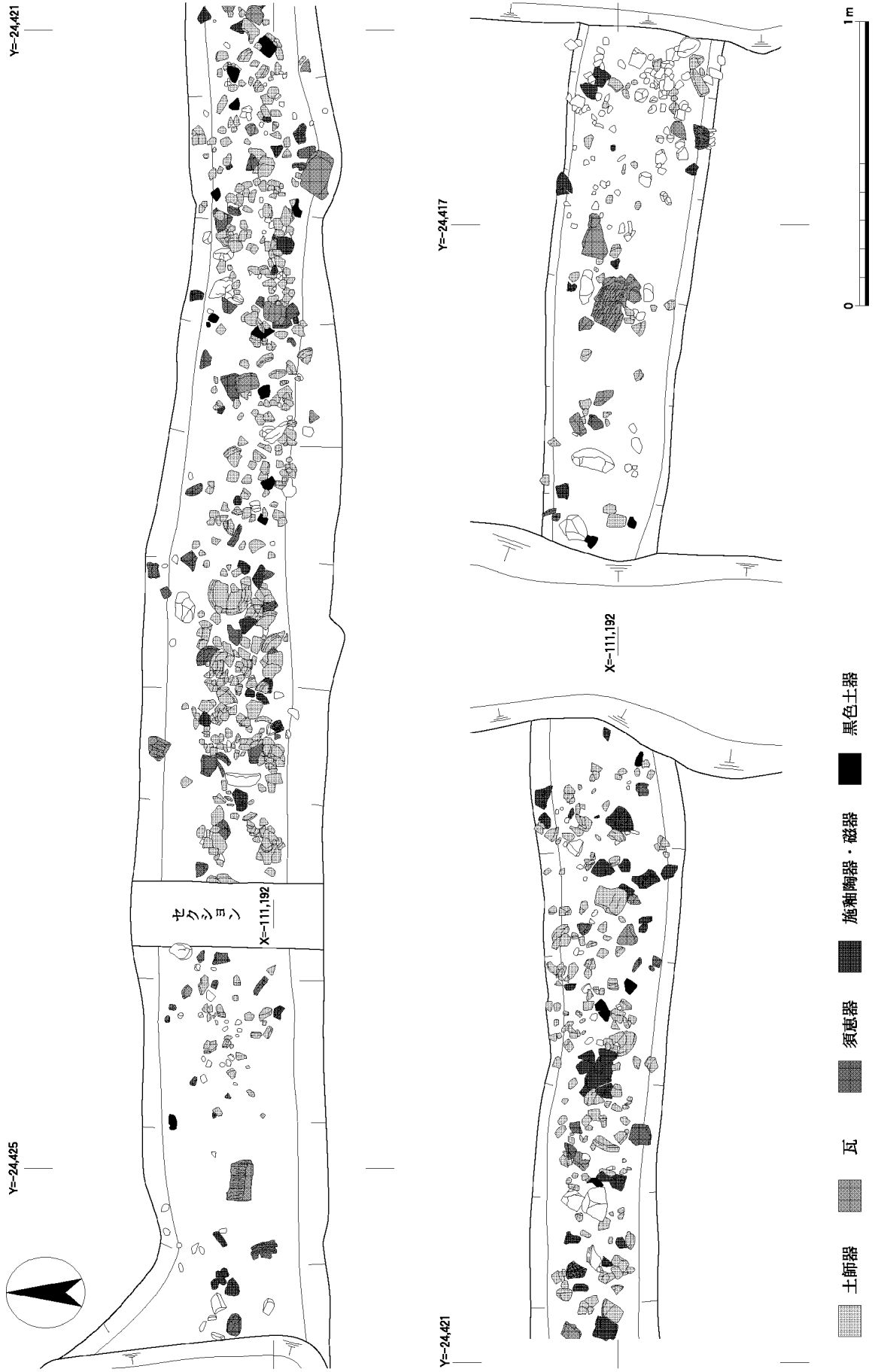


図9 溝2 遺物分布状況平面図 ( 1 : 20 )

建物3・4・5・8は東西棟の可能性が高い。これらの建物群は、柱痕跡ないし柱根が残存する建物1・5・6・7と、柱が抜き取られたものに大別できる。さらに抜き取り穴があるものは、焼土や赤く変色した壁土で埋め戻した建物4・8と、石・瓦などで埋めた建物2・3に分かれる。調査区中央北側で検出した東西棟建物3・4・5・8は、ほぼ同じ場所に重複して建て替えられていた。建物3・4は東一・二行境、北四・五門境の2本の推定ラインを跨いで建っている。建物5・8は東一・二行境を跨ぎ北四・五門境北側に沿って建っていた。

これらの建物柱穴の掘形は、径70cmの円形掘形をもつ建物7を除き方形で、一辺70cm前後、深さ40cm前後の建物と、やや小型の一辺50cm前後、深さ30cm前後の建物に分かれる。ただし柱の抜き取り穴によって不定形な柱穴も多い。柱根が残存していた柱当たり痕跡径は約15cmで細い。今回の調査では庇付建物は8棟中建物2・7に留まったが、庇を支える柱穴は建物構造全体を支える母屋部分の柱穴に比べ浅く小さい傾向があり、また溝の深さや柱穴が浅いこと、焼土層・被災面などを一切検出していないことから、耕作などによる遺構上面の削平が考えられ、庇部分の柱穴が消滅している可能性もある。

以下、個別の建物について概説する。

建物1（図10、図版2-2・4-1） 調査区西端で検出した建物1は、南北方向に長く、8尺等間で梁行2間×桁行5間分を検出した。南端はさらに調査区南に延び、桁行6間以上の建物である。建物1を構成する柱穴のうち、柱穴174だけに直径約20cmの柱の抜き取り穴があり、その中に9世紀初頭の土師器皿1個体・須恵器杯3個体・須恵器瓶子1個体が詰め込まれていたため、これがこの建物の廃絶期を示している。また2基の柱穴175・180に柱根が、他には柱痕跡が残存していた。

建物2（図11） 建物2は建物1の東側に建つ8尺等間の南北棟建物で、東に庇が付く。柱穴は小さく浅いものに分類できる。軒の出から考えて建物1と同時併存は不可能で、出土遺物から見て後に建てられた建物である。すべてに柱の抜き取り痕があり、庇部分と考える柱穴97の抜き取り穴より10世紀前半の土師器を検出している。建物は調査区北に延長する。

建物3（図11、図版3-1） 建物3は建物2の東に建つ8尺等間の東西棟建物である。北側柱筋が調査区外となるが、2間×3間の建物である可能性が高い。溝1によって隔てられているが、建物2と柱穴の規模が似ている。すべてに柱の抜き取り痕がある。建物3の南東隅となる柱穴131の柱抜き取り穴より建物2と同じ10世紀前半の土師器を検出している。

建物4（図12、カラー図版1-1、図版3-1・4-3） 建物4は調査区内で全容のわかる唯一の建物である。この建物は2間×6間の東西棟で、梁行が7尺、桁行が西5間分が6尺等間で東1間だけが9尺である。ただし桁行5間分の6尺等間で母屋を形成しており、母屋東側妻中央柱153が存在する。すべての柱穴に柱の抜き取り痕があり、抜き取り穴には焼土・炭に混じって赤化した壁土によって埋められていた。この建物は火災にあった可能性が高い。なお建物4の柱穴147・142は、建物3の柱穴212・135に切られている。柱抜き取り穴からの出土遺物に9世紀後半の長頸壺や赤化した焼瓦片がある。



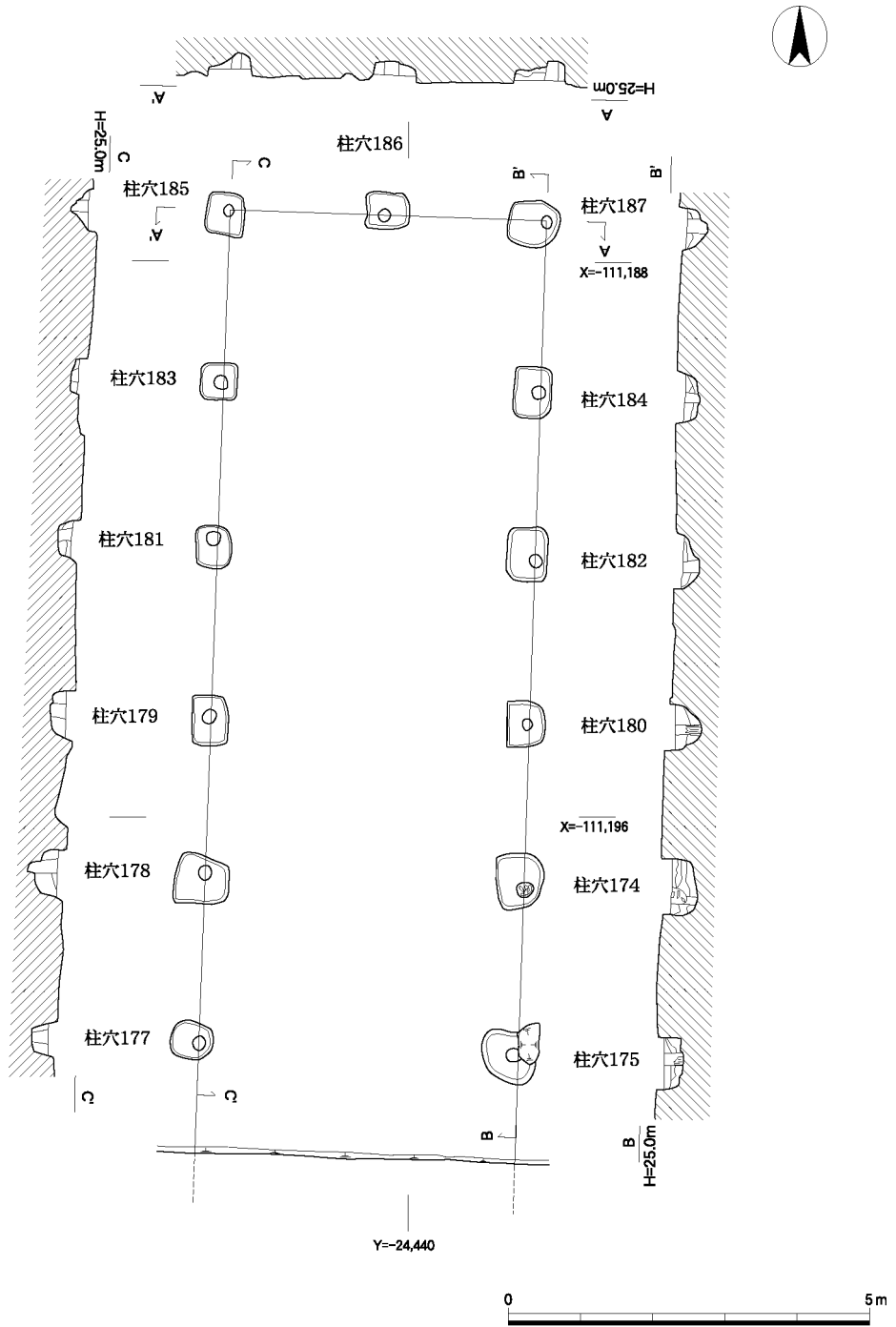
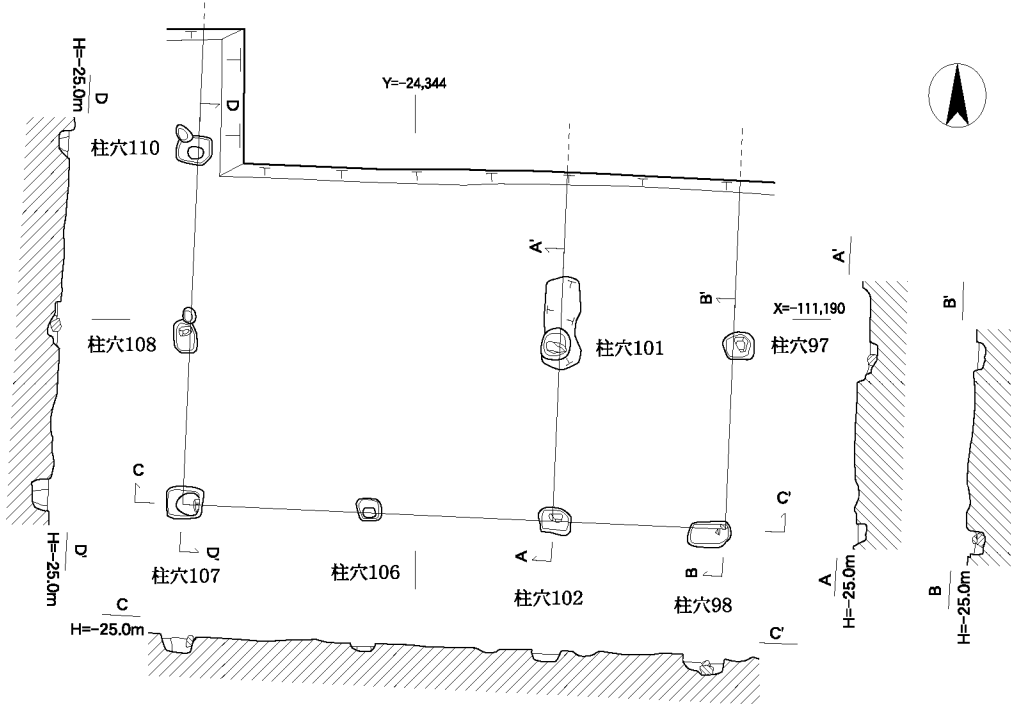


图10 建物1実測図(1:100)

建物 2



建物 3

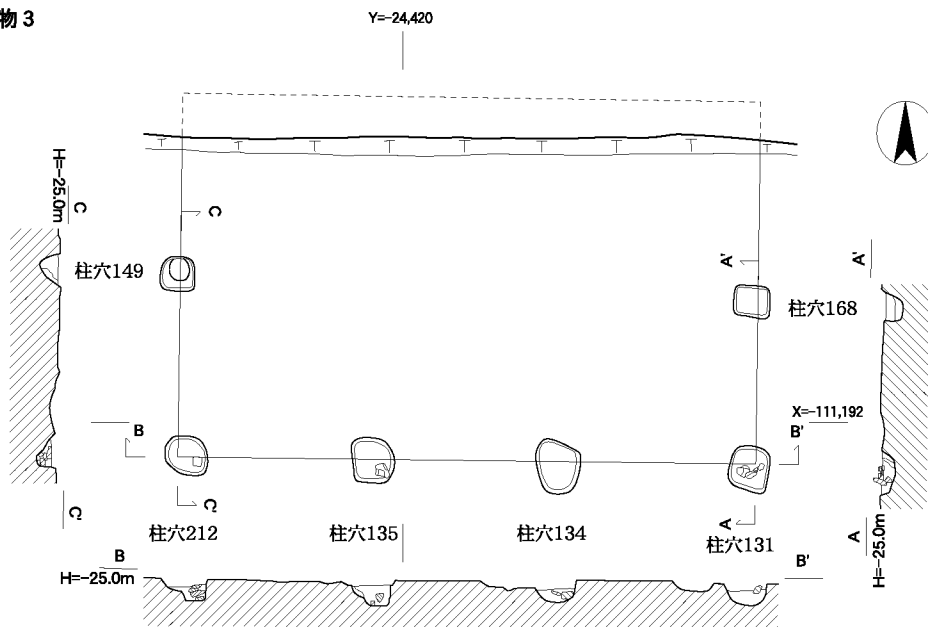


图11 建物 2・3 実測图 ( 1 : 100 )

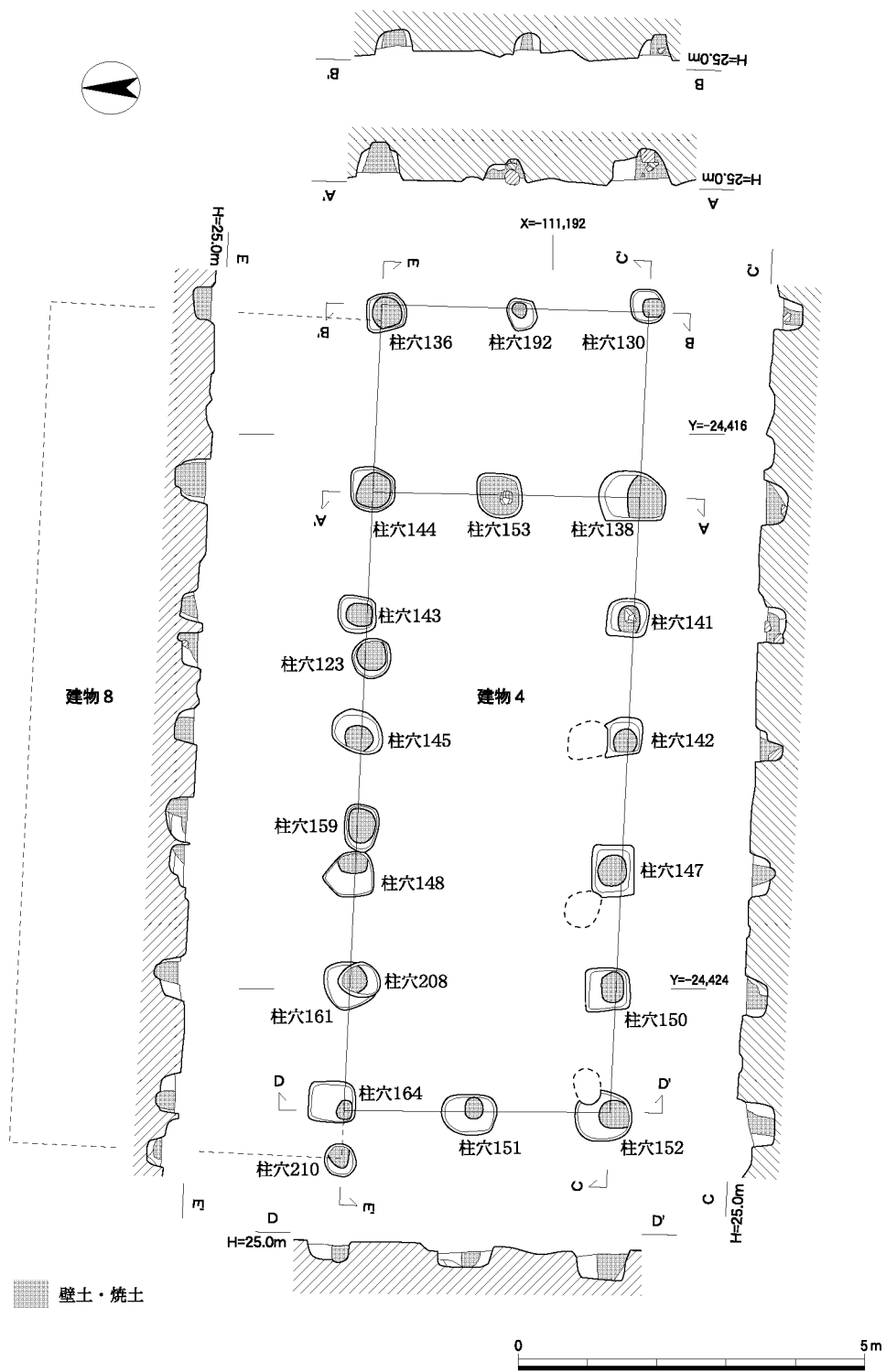
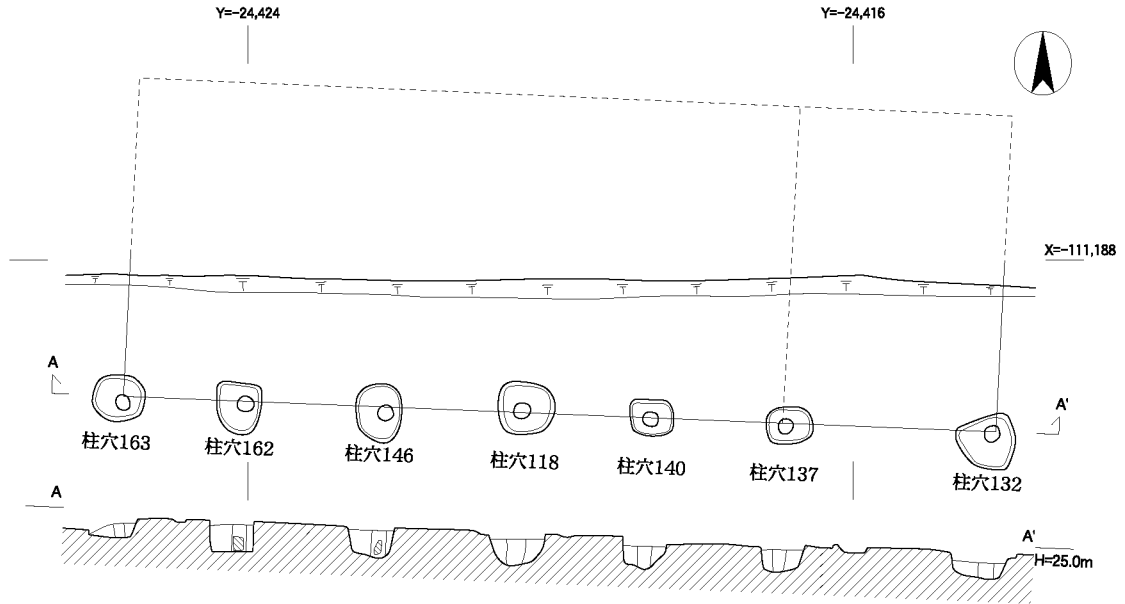
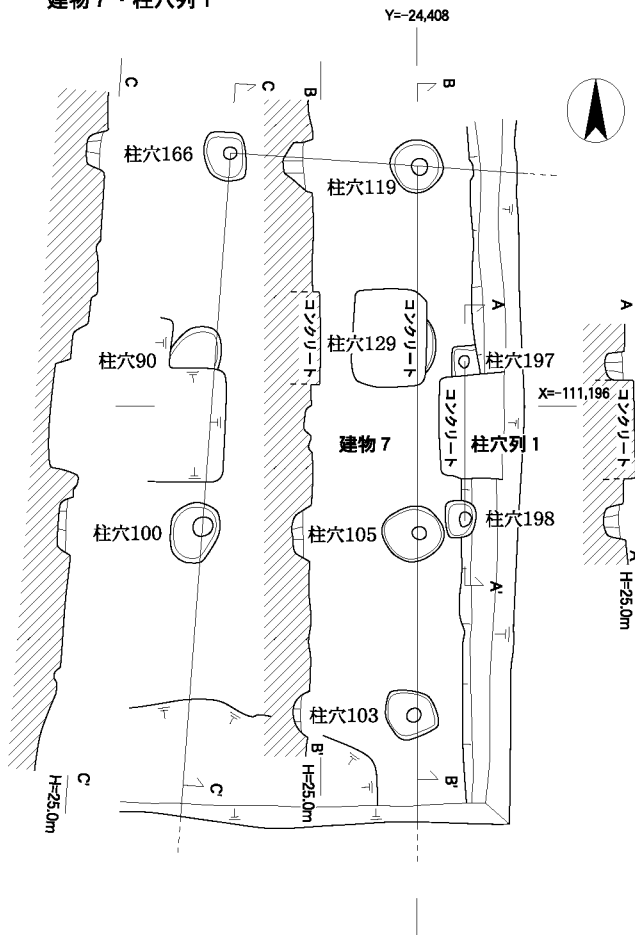


图12 建物4・8実測图(1:100)

建物5



建物7・柱穴列1



建物6

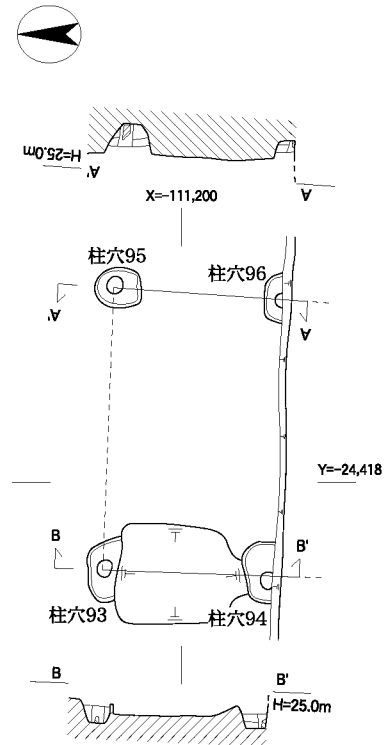


図13 建物5～7・柱穴列1実測図(1:100)

建物5（図13、図版3-1・4-2） 建物5も建物4とまったく同一の割付で3m北に平行移動して建っている。ただし、この建物は建物4にある柱の抜き取り痕がなく、柱穴146・162には柱根が残存していた。南柱筋しか検出していないが、調査区北側に建物4と同規模の建物として展開するものと考えられる。

建物6（図13） 調査区東半南壁に沿って4基の柱穴を検出しているが、妻側中央柱は検出していない。すべての柱穴に柱根が残存していた。調査区南側に展開するものと思われる。柱間は東西12尺・南北7尺である。この建物の北端から北7尺付近は、現代のコンクリートの土台があるため、北に延長するか否かは確認できない。

建物7（図13、図版3-2） 調査区東壁に沿って8尺等間で南北方向に並ぶ4基の柱穴と、その柱列西側8尺地点で南北方向8尺間隔の3基の柱穴を検出した。この2つの柱列は、やや方位がずれるが庇となる可能性がある。柱穴には柱当たりが確認できたが、柱根は遺存していない。この建物7は溝3を跨いで建っているため、溝より古いと考える。さらに南に延長するのかは調査区外なので不明である。柱穴掘形の形状は円形であり、柱穴103の底には石が据えられていた。

建物8（図12、図版3-1） 8尺等間の建物8は、建物4の北側柱筋と同列に並ぶ。建物4の北側柱筋と同一箇所重複する柱穴が3基あり、そのうち建物8に属すると考える柱穴161が建物4に属する柱穴208に切られていると判断した。したがって重複した建物4の柱穴144・136によって建物8の柱穴が消滅しており、溝1の底で検出された建物8の南西隅柱穴210を基準にすれば最低3間確認できるが、建物4と重複する柱穴を含めると4間ないし5間の建物であった可能性がある。ちなみに、南西隅柱穴210から南東隅柱となる可能性がある建物4の北東隅柱穴136までの距離は40尺である。検出した柱列は南柱筋となり、建物の大半が調査区外の北に展開する。この建物も建物4と重複しない柱穴210・159・123に柱の抜き取り穴があり、そこに赤化した壁土の破片が埋まっていたので火災にあった可能性が高い。

## （5） 柵列・柱穴列

柵列1（図14） 南北溝1東に沿って8尺等間で柵を構成する柱穴5基を検出している。ただし北の柱穴2基（柱穴114・109）は東に1間8尺の間隔で位置する建物3の柱筋と揃い、それを建

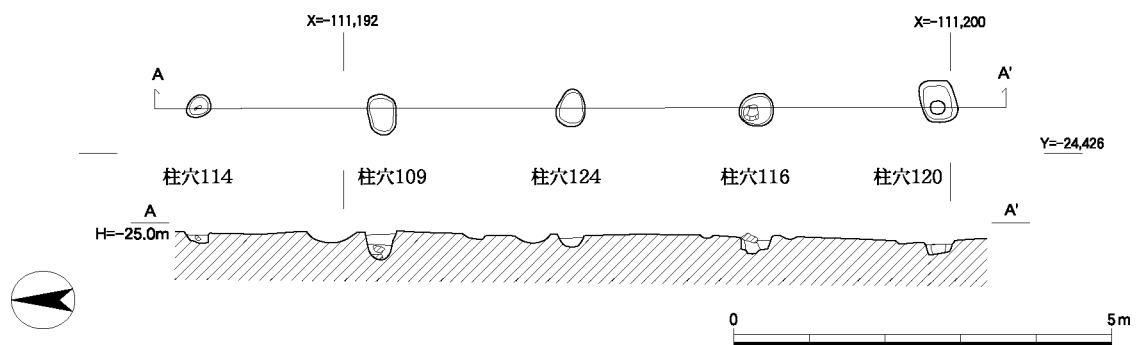


図14 柵列1実測図（1：100）

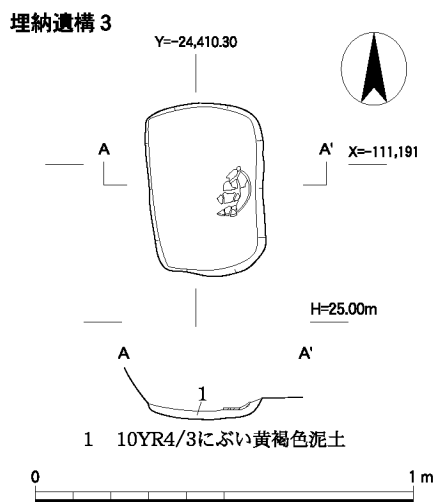
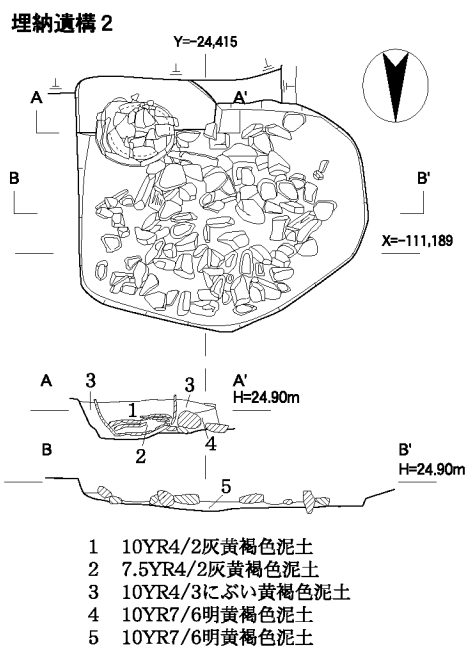
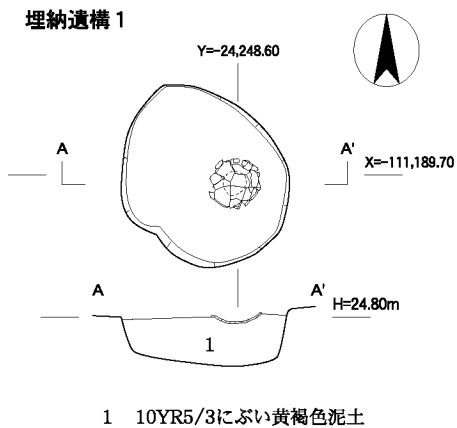


図15 埋納遺構 1～3 実測図 (1:20)

物3の西端と考えれば建物3西端に取り付く柵列になる可能性もある。この場合、建物3は1間西に広がることとなる。なお柵列の柱穴も小型で、柱の抜き取り痕が認められた。また柱穴109は建物4南西隅柱穴152を切っている。

柱穴列1(図13) 調査区東壁に沿って2基検出した。南北の柱間は7尺である。南北溝3によって柱穴東半分が切られている。柱当たりが残存していたが、柱穴は建物7よりも小型で方形である。重複する建物7との前後関係は、切り合いがないため不明である。

## (6) 埋納遺構

埋納遺構1(図15、図版4-4) 建物2東側で検出した径約40cm、深さ15cmの土壌199から9世紀後半の土師器碗を仰向きに置いた状態で検出した。

埋納遺構2(図15、図版5-1) 調査区中央の重複する建物群東側で、土師器甕底に9世紀後半頃の土師器碗5枚を俯せて埋納してあった土壌201を検出した。さらにその直下から径5cm大の円礫(チャート)を敷いた径約70cmのやや不定型な平底の土壌204を検出した。土壌201は径35cm、深さ10cm程であるが、据えてあった甕の上部は削平によって失われていた。甕を据えたところだけ円礫がなく、切り合いから一旦円礫の土壌204を埋めてから、再び甕を据えるために掘りなおした様相が窺われた。

埋納遺構3(図15) 建物7の北側で、やや長方形の長軸40cmの土壌209の底に9世紀初頭の土師器碗を仰向きに置いた状態で検出した。ただし、この遺構の大半は耕作溝によって削平されていた。

### 3. 遺物

#### (1) 遺物の概要

今回検出した遺物の大半は溝1～3からの出土で、須恵器・土師器・黒色土器・灰釉陶器・緑釉陶器・青磁・白磁・瓦などがあり、器種も豊富で供膳形態の土器類を中心に円面硯・風字硯などがある。また建物1（柱穴174）の柱抜き取り穴から出土した9世紀初頭の須恵器杯に「長」・「井」墨書があり、前者は「郡長」または「邦長」と読める。建物4・8の柱抜き取り穴から出土した壁土の上塗り白土に火山灰を用いていたことが自然科学分析の結果明らかにされた。火山灰使用例は7世紀の山田寺跡検出以来、全国で2例目となる。

#### (2) 土器類（図16～20、図版6～8）

ここでは、柱穴・土器埋納遺構・溝1～3から比較的良好な遺存状態で一括出土している資料、および建物の成立や廃絶などの時期を知る上で必要な資料などの内、実測図を示した資料を中心として、本調査で出土した土器・陶磁器について概説しておく。土器編年の型式は、当研究所『研究紀要』第3号の「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」に従った<sup>1)</sup>。

##### 建物柱穴・埋納遺構・土壙172出土遺物（図16、図版6）

建物1の柱穴174柱抜き取り穴からは、少量ながらほぼ完形に復元しえる須恵器杯B3個体（1～3）・壺M1個体（4）土師器皿A1個体（5）が出土している。（2・3）の須恵器杯Bの底部外面には前記の墨書がみられる。須恵器、土師器ともに、長岡京（期）出土土器とに大きな型式差を見出すことは難しく、京都 期中に属する平安京最古型式に属する資料と言える。推定実年代は8世紀末～9世紀初頭頃に比定される。

埋納遺構1からは、1/2以上遺存していた土師器椀Aが1点（6）出土している。体部から口縁部にかけて外方への開きが強くなっているが、外面のヘラケズリ痕は丁寧さを残している。

表2 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
縄文時代	サヌカイト剥片・チャート剥片		サヌカイト剥片3点、チャート剥片2点		
平安時代	土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・黒色土器・白磁・青磁・壁土・水晶・基石・瓦		土師器58点、須恵器36点、緑釉陶器21点、灰釉陶器18点、黒色土器12点、白磁8点、青磁3点、壁土2点、石製品7点、瓦1点		
室町時代	土器				
合計		45箱	171点（8箱）	30箱	7箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、ランク別に分類したため、出土時より2箱多くなっている。

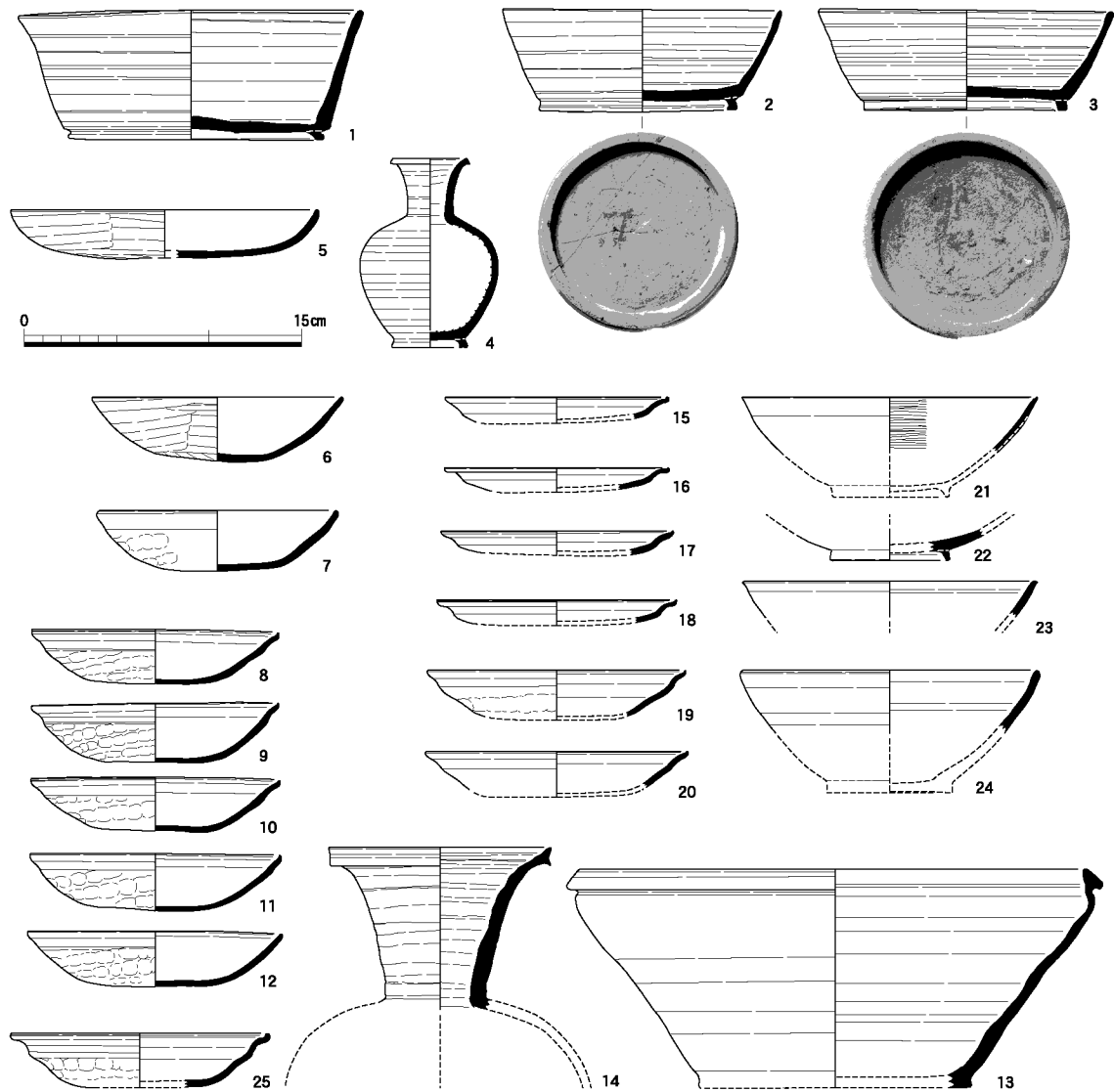


図16 建物柱穴・埋納遺構・土壙172出土土器実測図（1：4）

期中新相～ 期新古相という幅に収まる資料と見ておき、実年代は9世紀前葉頃と推定しておく。

埋納遺構3からも埋納遺構1と同様に、1/2強が残存していた土師器椀Aが1点（7）出土している。外面のヘラケズリ調整は喪失しているが全形は 期の椀Aに通じ、器壁は厚手感を残している。 期では古に位置する資料と見ておき、9世紀中葉頃の資料と見ておく。

埋納遺構2からは、図示した（8～12）5個体の土師器椀Aが重なりあった状態で一括出土している。5個体はわずかな個体差は見られるが同一型式とできる資料である。全形は小径で深さがあり、すべてe手法で仕上げられたものとなっている。口縁部は5個体ともナデによるやや外反したものとなっている。 期中に属し、9世紀後葉頃に比定できる資料と見ている。

建物3の柱穴131柱抜き取り穴からは、土師器皿A・杯A・甕、須恵器（椀）鉢・壺・甕、黒色土器A類椀・甕、緑釉陶器椀、灰釉陶器椀など各種の土器・陶器類が出土しているが、大片はごく少なく小片での出土が主である。土師器杯A（19・20など）では、全形、口縁形態に古相を多く残すが、土師器皿A（15～18）は、口径12cm台のものが中心となっており、口縁部が外方



へ強く屈曲する個体が主体的である。これらの点も踏まえて、土師器（小型）食器類は 期古に属する資料が主と見ておく。これに伴う緑釉陶器椀（22）、須恵器椀（24）はわずかに古く位置付けられる可能性があるが、灰釉陶器椀（23）、黒色土器A類椀（21）は同時期の共伴資料と見てよいだろう。実年代は10世紀第2四半期中心に理解しておく。

（25）の土師器杯Aは、建物2の柱穴97の柱抜き取り穴から出土している。器壁の薄手化と口縁部の屈曲度合などから、建物3の柱穴131出土土師器（小型）食器類と同様に 期古に位置付けられる。

（14）の須恵器壺として報告している長頸壺の口縁部から頸部は、建物4の廃絶期を示す指標となり、体部以下を欠失した状態で出土している。頸部外面には厚めの灰釉が一部残存しており、灰釉陶器の可能性が高い。9世紀後半の 期中に収まる資料と見ておきたい。

（13）の須恵器鉢は土壌172から出土している。口縁部を含むかなり大きな破片ではあるが、他の3/4以上は欠失している。焼成が甘く、胎土は軟質である。器表の磨滅が進み判然としないが、本来的には口縁部外面には灰黒で帯状に炭素吸着していたと見られる。形態的には、口縁端部が内傾する縁帯状に発達した形状を呈するようになっており丹波の篠窯産と特定できる。9世紀末～10世紀初頭頃に比定できる資料と見ておく。

#### 溝1～3出土遺物（図17～20、図版7・8）

溝1～3の3条の溝として報告しているが、先に遺構の項で記したように相互の切り合い関係は確認されず、堆積土も一連するものと理解される。溝1～3は、平面形がH字状を呈して連なって、同時期に機能していた溝と考えている。3条の溝からは、平安時代の土器・陶磁器類の他に瓦類、木製品、石製品、鉄製品など各種の遺物が数多く出土しているが、量的には土器・陶磁器類が主体を成している。各溝で出土量の多少はあるが、型式およびその組成は、よく類似している。これらの点も3条の溝が並存する一連のものであった事を支持している。以下では、図示したものを中心にして溝出土遺物について記す。

溝1からは遺物箱にして10箱となる最も数多くの遺物が出土している。土器陶器類では、土師器皿A（109・110）・椀A杯A（111～115）・皿（116・117）・高杯（118）・甕（119～122）黒色土器A類（内黒）椀（123・124）・鉢（125）・焜炉（126）、須恵器鉢（141～146）・壺（147～151）・甕（152～156）緑釉陶器椀皿（127～134）灰釉陶器椀皿（135～138）輸入陶磁器、白磁椀皿（139）・托（140）などを図示した。他に、土師器杯B盤・須恵器杯A壺・甕、古手混入品として杯（B）・同蓋、緑釉陶器壺、灰釉陶器壺、輸入青磁壺などの破片も一定数出土している。杯A・皿を主体とする土師器の（小型）食器類が量的には大きな位置を占めているが、近郊農村地域の同時期の遺跡に比べると、椀・皿などの食器類を中心とする、緑釉陶器、灰釉陶器、輸入青磁、白磁などの出土量がかなり多い。土師器（小型）食器類の出土数がかかなり多いにもかかわらず、出土率もかなりの高さを示している。

溝2からは、溝1にほぼ匹敵する量の遺物が出土している。組成的には土師器（小型）食器類の出土量が占める位置が、溝1よりやや高い。また、比較的短時間で接合できた、やや大きい破

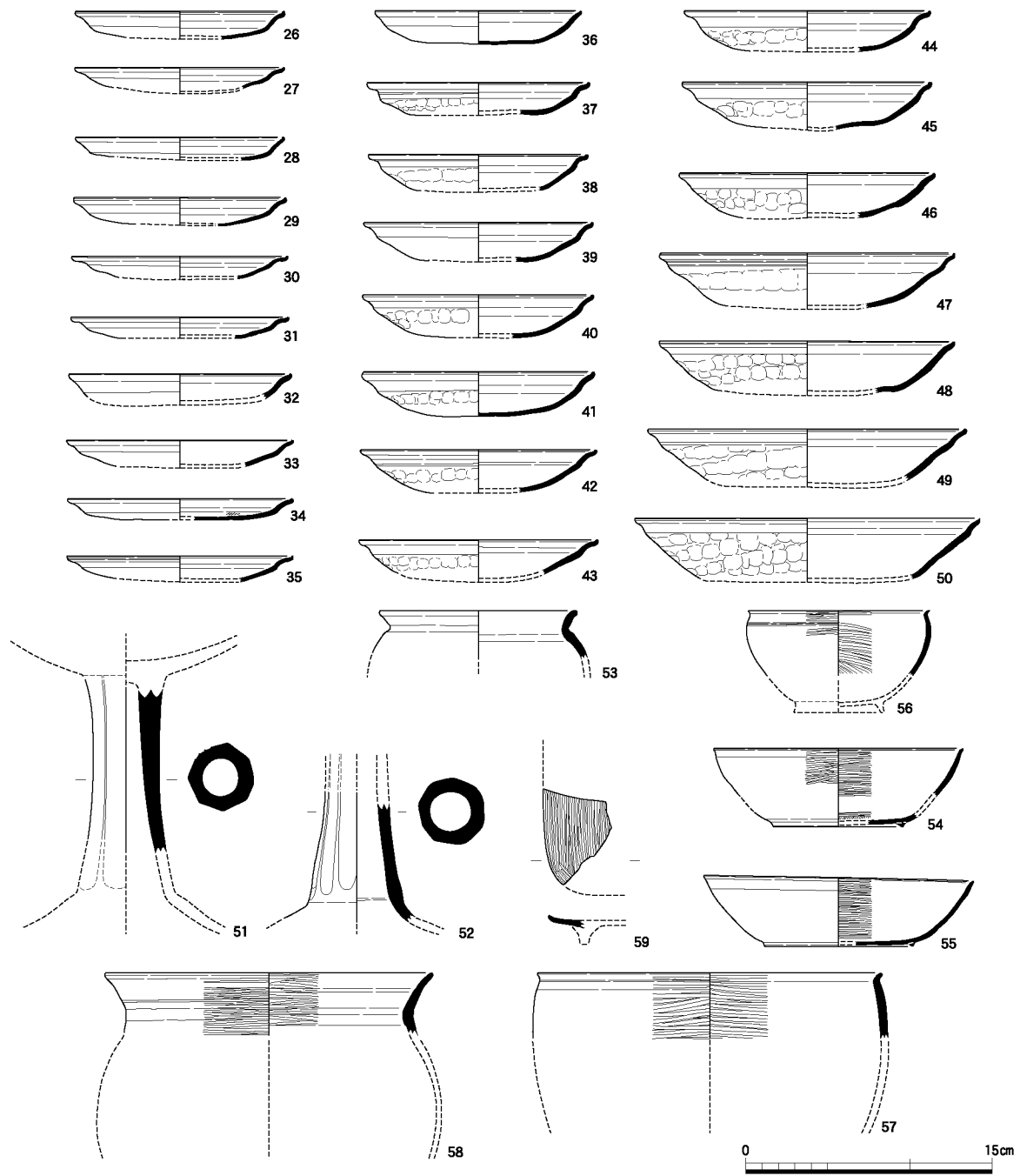


図17 溝2出土土器実測図1(1:4)

片も多く、今回の整理で実測図をとった個体数も多い。

溝2から出土した土器陶器類では、土師器皿A(26~35)・椀A杯A(36~50)・高杯(51・52)・甕(53)・黒色土器A類椀(54・55)・鉢(56・57)・甕(58)・風字硯(59)、須恵器椀(89~91)・鉢(92~96)・壺(97)・円面硯(98・99)、緑釉陶器椀皿(60~70)、灰釉陶器椀皿(71~79)、輸入陶器青磁椀(85・87)・青磁鉢(88)・白磁椀皿(80~84)・白磁鉢(86)などを図示しており、他の出土資料も溝1とほぼ共通している。

溝3の出土遺物箱数は2箱にとどまる。組成的には溝1・溝2にほぼ共通したのが見られる。その内で土師器高杯(100)、黒色土器風字硯(101)、須恵器鉢(107・108)、緑釉陶器段皿

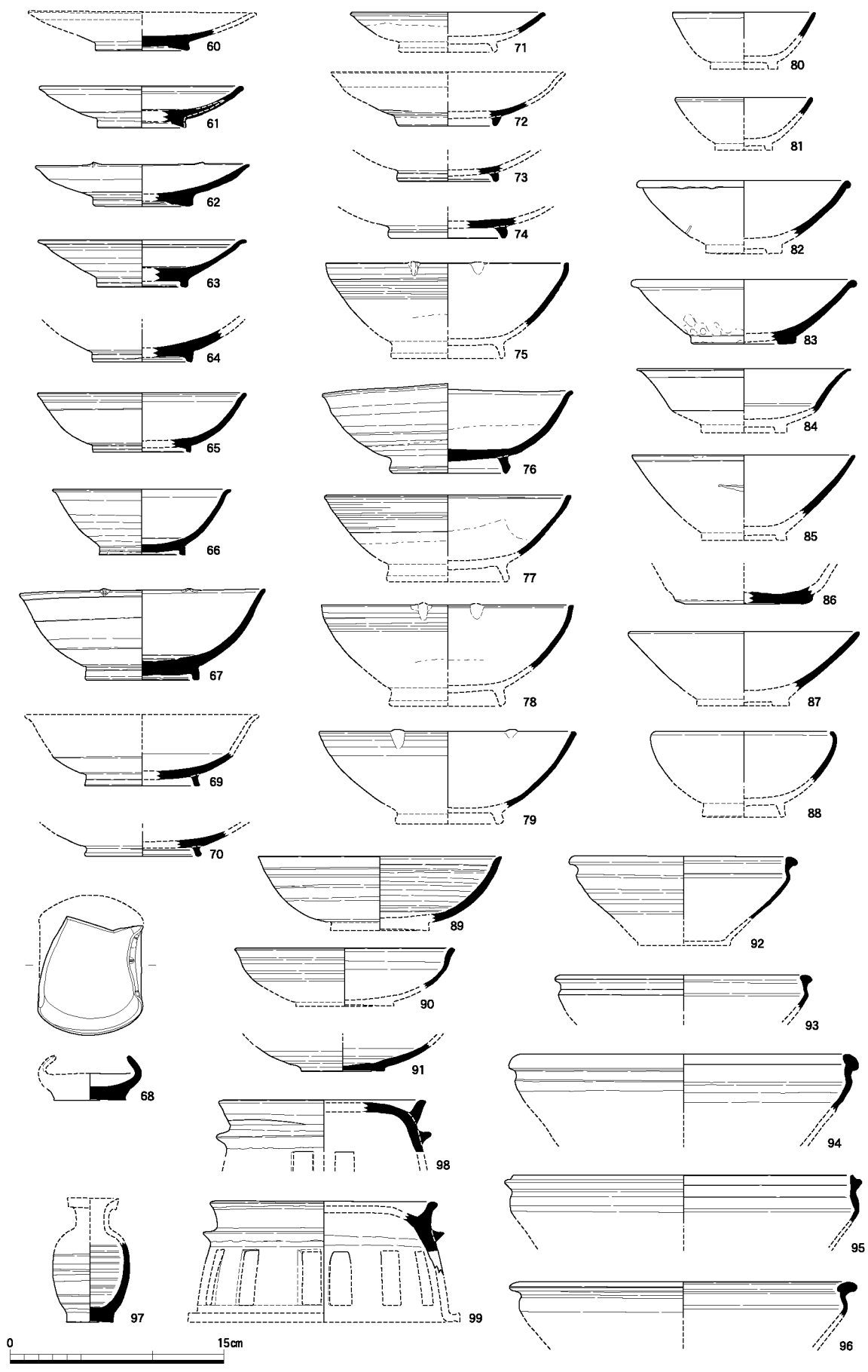


图18 沟2出土土器实测图2(1:4)

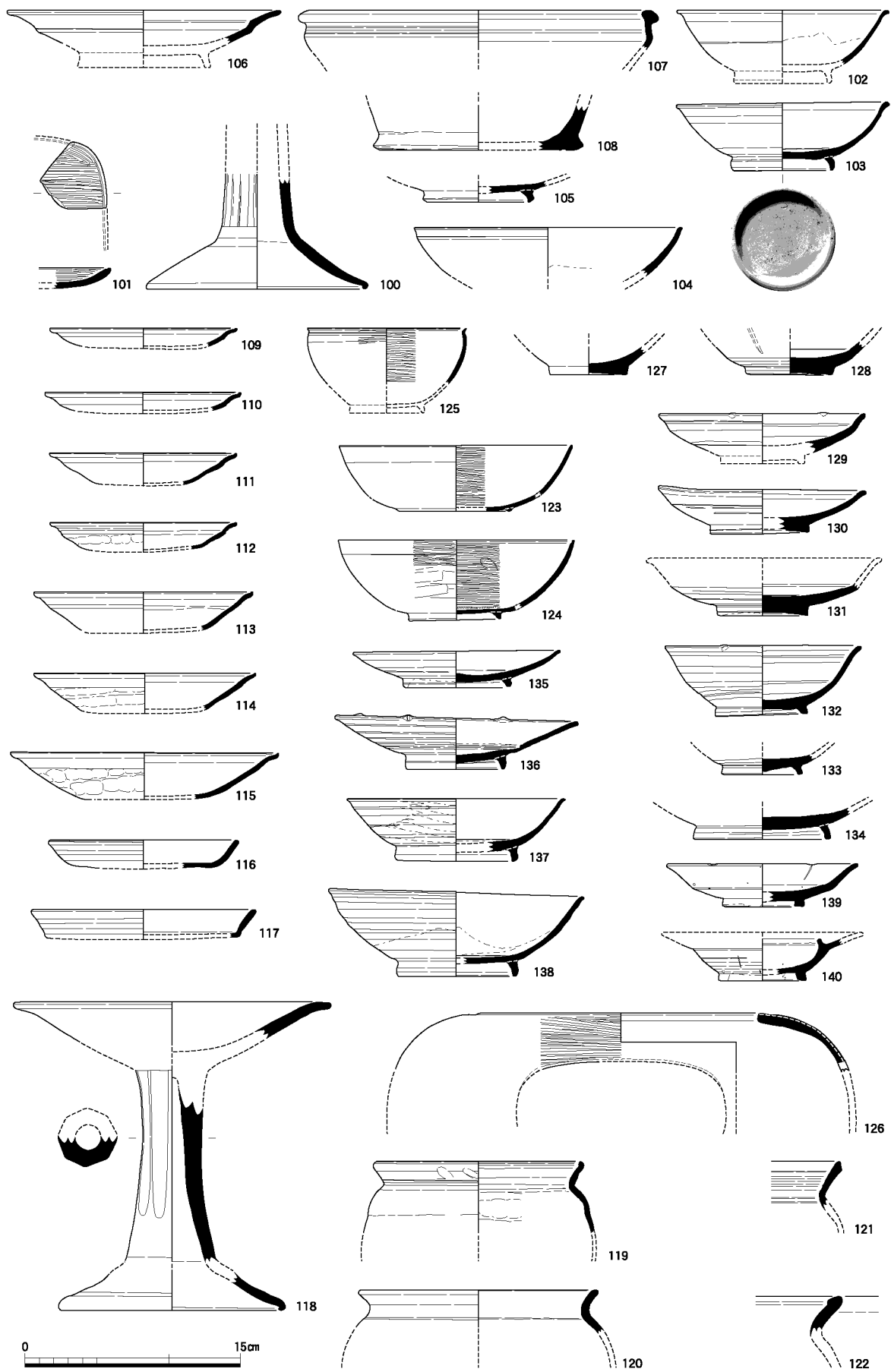


图19 沟1·3出土土器实测图(1:4)

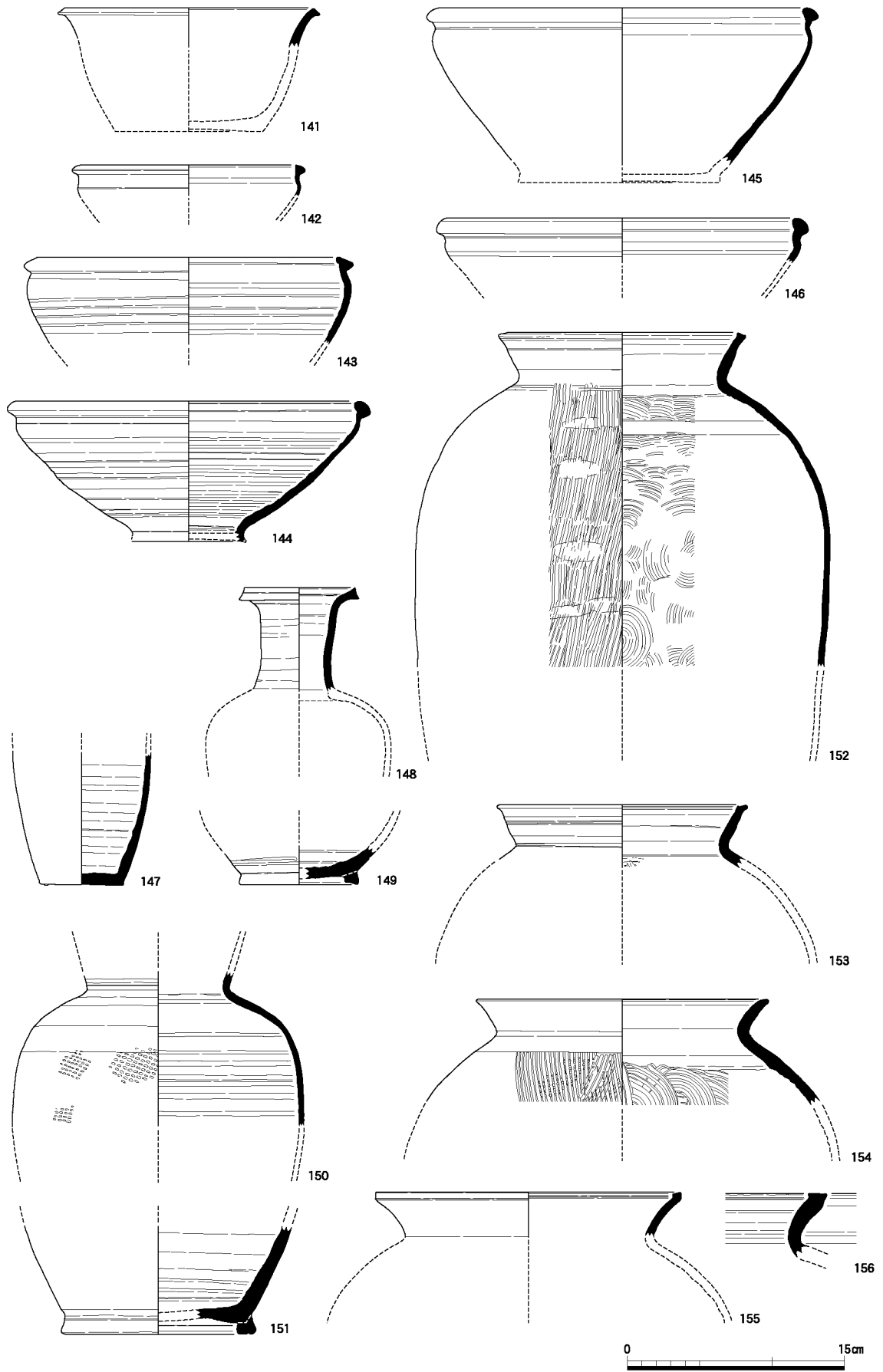


图20 沟1出土土器实测图(1:4)

(106) 灰釉陶器椀(102~105)などを図示した。

溝1~3から出土している土師器杯A・椀A・皿Aなどは、内面に八ケ目痕を残すものも見られ、すべてe手法で仕上げられている。器壁の薄手化が進んでおり、口縁部の外反が強いものから、外方へ屈曲するものまで含まれている。黒色土器の食器類では、薄手となった高台の付くA類(内黒)椀が主体であり、B類(全黒)の食器類は確認できなかった。緑釉陶器椀皿類は、貼り付け高台の東海産(69・70、133・134など)も少数見られるが、削り出しの輪高台を主とする、山城系の丹波篠窯産(60~67)が主体となっている。灰釉陶器椀皿類は、いわゆる三日月高台が三角形方向へのやや退化傾向を示し、器壁が黒笹90号段階のものに比して若干薄手化傾向が認められる。美濃産(135~138)と見られるものが多くなっている。型式認識では猿投編年<sup>2)</sup>でいう黒笹90号窯段階に後続する折戸53号窯段階に比定できるものが中心のようである。

須恵器では、古手混入品と見られる杯類を加えても食器類はごく少なく、鉢・壺・甕などが圧倒的に多い。なかでも三角玉縁状にまで発達した口縁形状を呈する篠窯産の鉢類は、出土量の多さ、出土状況ともに注目される。輸入白磁椀類では、9世紀代で主となっていた蛇ノ目高台のものがほとんどみられなくなっており、越州窯青磁椀も輪高台が主となっている。

このような型式特徴を持っている各種の土器陶磁器類が構成する組成、および量比も加えたその構造は、京域内では一般的と理解してよいものだろう。既報告資料では期新としている左兵衛府SD01<sup>3)</sup>、あるいは期古としている平安京右京二条三坊十五町SD13・14・23出土資料<sup>4)</sup>の両者に通じる要素を持つ資料と考えられる。土師器食器類の型的まとまりはあると見ているが、このような様相認識から、どちらかに断定的に位置付ける見方をとらずに、期新(中相)~期古(中相)に渡る型式幅を持った資料が中心的であり、それらに緑釉陶器、灰釉陶器などでは伝世使用品とも見られる期古~期新(古相)の資料が含まれていると見ている。主体的な器物

の推定実年代は、10世紀前半代の平安時代前期末から同中期初め頃と考えている。

### (3) 壁土(図21、カラー図版1-2)

建物4・8の柱抜き取り穴に詰まっていた、総計12kgの赤化したスサ入りの粘土塊は自然科学分析によって、始良火山灰を主体とする白土(ガラス質80%)を仕上げに塗った壁土であることが判明した。壁土の裏に割木による木舞跡が残存するため壁土と判断した。白土が塗ってあ

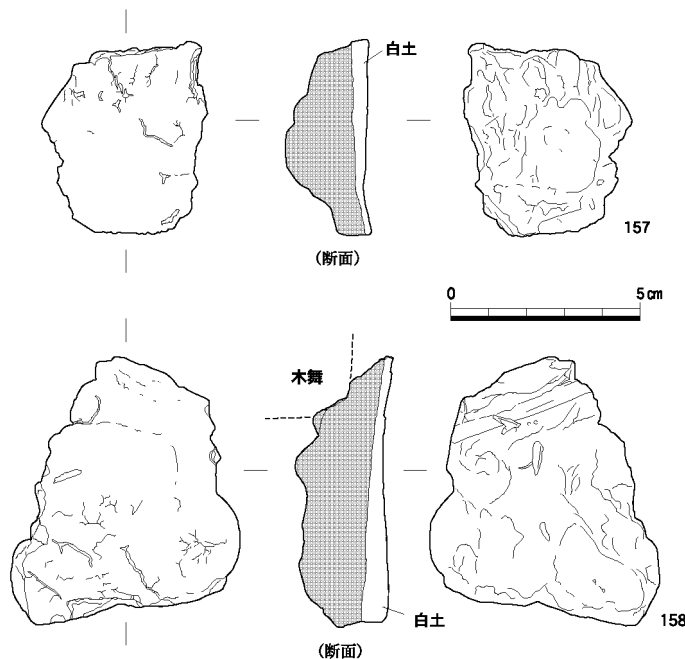


図21 壁土実測図(1:2)

る部分は全て面を形成している。顕微鏡分析の結果、火山灰のガラス質にひび割れや飽和状態が生じていたことで火災によって壁土が赤化したことが証明された。このことは壁土と共伴して出土した瓦が赤化していたことと符合する。図示した壁土（157・158）は建物4の柱穴151柱抜き取り穴から出土したものである。なお建物3の柱穴からも焼けた壁土を少量（32g）検出しているが建物4・8の壁土残骸が混入したものであると思われる。壁土と火山灰に関する自然科学分析の結果は付章で詳論する。

#### （4）木製品

今回検出した木製品は腐食の進んだ柱根のみである。柱根が残存していた建物1・5・6の柱部材は顕微鏡分析の結果、すべて檜であることが判明した。また建物4・8の柱抜き取り穴に詰まっていた炭の木質は針葉樹系であることが顕微鏡分析によって明らかにされた。

#### （5）石製品（図22）

剥片（159～163） 弥生時代の遺構に伴うものではないが、今回検出した平安時代の遺構や耕作溝からサヌカイト剥片6片（159～161）・チャート剥片2片（162・163）を検出した。

火打ち石（164） 建物5の柱穴146からは人為的に成形され角張った乳白色の玉髓片が出土した。稜線に沿って殴打によると思われる白潤化した使用痕が残る。近世の火打ち石に玉髓製のものがあり、形態も類似していることから火打ち石の可能性はある。

水晶（170） 溝1からは自然結晶面のない水晶塊を検出している。すべての面にフィッシャーがあり粗く円形に加工されているが磨かれていない。用途などは不明である。比重2.66・硬度7

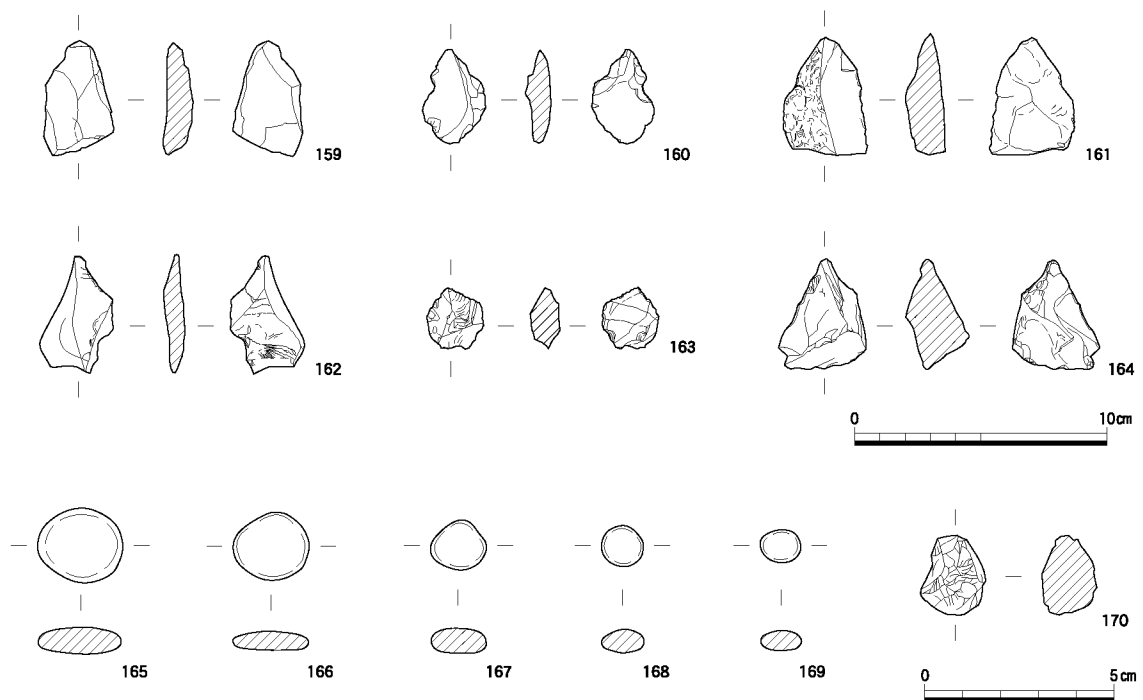


図22 石製品実測図（159～164は1：3、165～170は1：2）

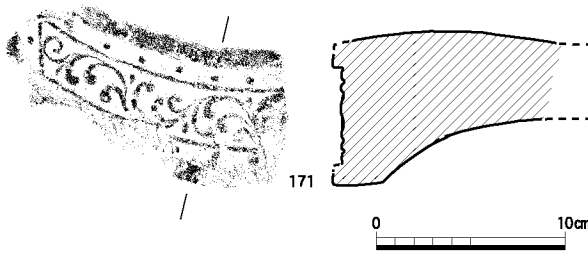


図23 軒平瓦拓影・実測図(1:4)

で水晶(白石英)である。

玉石(165~169)(165・166)は建物8の柱穴161から出土した径約2cmの扁平な研磨された玉石で、(165)が黒色、(166)が青みがかった白色である。(167~169)は径約1cmの石英製の白玉で研磨されている。溝2・柱穴161などから8個出土した。

重さは平均で1.1gである。白玉は須恵器瓶子に径0.5cmの25粒入れて埋納していた例が平安京右京二条二坊五町<sup>5)</sup>にあり、また「齋宮跡」<sup>6)</sup>からも出土している。(165・166)は形態・色からすれば碁石に類似するが白玉と同じ柱穴から出土していることから祭祀に関わる可能性もある。

## (6) 瓦類(図23)

平安時代前期の西賀茂瓦窯産と考えられる軒平瓦(171)が建物3の柱穴134の柱抜き取り穴から出土した。焼きが甘く火災による二次焼成を受けているが、建物3に葺かれていた瓦ではないと考える。今回の調査で出土した軒瓦はこの瓦のみである。

### 註

- 1) 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号(財)京都市埋蔵文化財研究所 1996年
- 2) 斉藤孝正「東海地方の施釉陶器生産」『古代の土器研究会-律令的土器様式の西・東3施釉陶器』古代の土器研究会 1994年
- 3) 平尾政幸「平安宮左兵衛府跡」『平安京跡発掘調査概報』京都市埋蔵文化財研究所概報集1978-(財)京都市埋蔵文化財研究所 1978年
- 4) 平尾政幸「平安京右京二条三坊」『平安京跡発掘調査概報』昭和61年度 京都市文化観光局 1987年
- 5) 東洋一・網伸也・真喜志悦子「平安京右京二条二坊」『平城7年度 京都市埋蔵文化財概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1997年
- 6) 鈴木廣司・網伸也ほか『平安京右京三条二坊十五・十六町-「齋宮」の邸宅跡-』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第21冊(財)京都市埋蔵文化財研究所 2002年



## 4.まとめ

今回の調査によって平安京造営期から10世紀半ばまでに収まる遺構群を検出した。その遺構群を切る70条以上の耕作溝から出土した少量の鎌倉時代末から室町時代初期の遺物を除いて平安時代中期以降の遺物を検出していない。このことは調査地が10世紀半ばには荒れ地化、もしくは耕地化したことを遺構・遺物の検出状況から正確に反映しており、平安京右京衰退の一端を示すものと考えられる。次に宅地班給に関しては最小区画ライン（東一・二行の境・北四・五門の境）を建物3・4・5・8が跨いで建っていることから少なくとも三町の東側で4分の1町以上であり、出土遺物の豊富さや種類の多様さも、それを示している。またこの東一・二行の境は三町東半分の東西中軸ライン（道祖大路築地心より30m西ライン）となり、その中軸ライン上に10世紀半ばまでに同位置に少なくとも建物3・4・5・8の4回の建て替えがあった（図24）。その内もっとも古いと考えられる8尺等間の建物8の火災後に建てられた建物4・5は桁行が6尺等間で6間2間の母屋を形成し、さらに東に9尺の間分を付加した特殊な建物である。同位置に建て替えが行われたことは敷地内で重要な位置を占めていたことを物語っている。建物4と建物5の前後関係は切り合いがないため明確にできないが、火災にあった建物4の後、柱根が残存していた建物5が再建された可能性が高い。10世紀前半代の遺物が多量に破棄してあった溝1・2・3の開削時期は建物群4・5・8の西側妻柱列を溝が切っていることから、それらの建物群が廃絶した後である。

今回検出した建物群の年代は、建物1が廃絶期を示す柱抜き取り穴に埋まっていた9世紀初頭の遺物によって、平安京造営期に遡る可能性が高い。建物4・5・8は溝1・2・3との重複関係によって少なくとも10世紀前半までに廃絶している。さらに建物4の柱穴を切っている建物3は柱抜き取り穴から検出した土師器が溝と同時期の10世紀前半であることを示しており、この時期に廃絶している。溝内の遺物が最終建物である建物3の廃絶期とはほぼ同時期で、建物3の廃絶に伴って遺物が溝に破棄された状況を示しているため、建物3は溝2を跨いで建てられていた可能性がある。この建物3は建物2と南柱筋が揃っており、溝1に沿った柵列1とセット関係にある。建物2の柱抜き取り穴から10世紀前半の土師器を検出しているため、建物2・3、柵列1、溝1～3は、ほぼ同時期に廃絶した可能性が高い。建物4は柱穴151柱抜き取り穴から出土した遺物の年代観から9世紀末には廃絶しており、建物4・5・8は建て替えの頻度から考えて平安時代前期から10世紀までに建て替え続けられた可能性が高い。また建物7の北で検出した埋納遺構3の土師器杯の年代観が9世紀初頭の様相を帯びているため、建物7も9世紀初頭に遡る可能性がある。

また建物4・8の柱抜き取り穴から火山灰を主成分とする白土を塗った壁土を多量に検出している。このことから、壁土が建物4・8に使用されていた可能性が考えられる。また建物4柱抜き取り穴から火を受けた瓦が出土していることは少なくとも棟には瓦を葺いていた可能性がある。また他の建物が8尺等間が中心であるのに対し、建物4・5の母屋柱間が短い6尺を使用してい

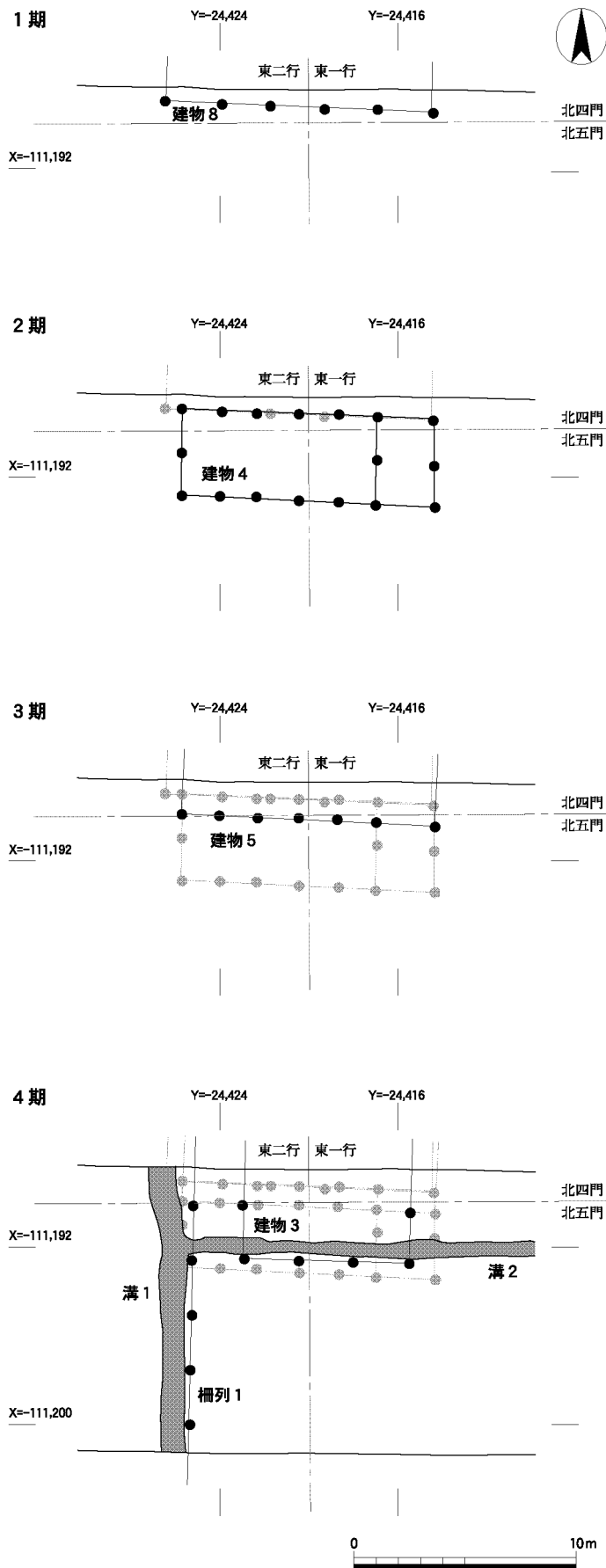


図24 建物3～5・8変遷図(1:300)

る点も特殊である。これらの建物は母屋の一部を塗籠にしていたか小壁などを用いていた可能性があり、特殊な用途が考えられる。

以上見てきたように建物の成立年代および建物構成から、溝と溝1に沿って建てられた柵列1や柱穴が小さな建物2・3が建てられた時期とそれ以前の柱穴が大きい段階とに大別でき、10世紀前後に敷地内の空間利用に大きな変化があったことを窺わせる。ただし溝1とそれに沿って建てられた柵列1が宅地内の区画なのか、宅地が細分化されていく過程を示す区画なのかは今回の調査だけでは断言できない。また前期の建物群のうち8尺等間の建物1・7・8は互いに離れて建てており、当初は8尺等間の建物だけで構成されていた可能性もある。

調査地一帯は農村地帯であった西院村が京都市に編入された昭和6年以降の区画整理事業とともに市街化されてきたが、今日でも厚く嵩上げされたコークス層とその下の耕作土によって平安京造営期から10世紀前半までの遺構が良好に保存されていた。また遺構に伴うものではないが剥片が出土していることから現在指定されている西院遺跡の範囲がさらに広がる可能性がある。今回の調査によって今後の近辺調査の大きな手掛かりがつかめたと考えている。

## 5 . 付章 柱穴出土の壁土片の分析

### ( 1 ) はじめに

今回出土した壁土は、建物3・4・5・8の合計20基の柱穴から出土したもので、大部分は建物4・8の柱の抜き取り部分のものである。壁土に共伴して少量の土器類・針葉樹の炭化材などが出土している。この度、自然科学的手法を用いて、この壁土の分析を行ったので、以下にその結果を述べる。

### ( 2 ) 壁土試料の分析

#### 1 ) 分析試料

今回試料とした壁土は上下2層に分かれ、上層は0.3～0.7cm、下層は最大約3.5cmの厚みがあり、上層は上塗り、下層は荒壁の2層構造で中塗りはなかったと考える。上層は主に白くきめ細かい土に少量の細粒の砂を含み、下層は主に赤くきめ細かい土に砂や若干の礫と2.5cmまでの藁と思われるスサを含むが、京都市内の他調査で出土した荒壁と比較すると土・砂礫などのきめ細かさが際立つ。壁土には部材の当たった痕跡、柱際の上塗りの高まり、スサの残存が確認できる。各遺構から出土した壁土の重量は、表3に見られるように柱穴138・142・150・151・152・164・192で多く、合計12,285gを量った。しかし取り上げたのは半截した残存部分であったので、実際にはその倍の分量があったと考えられる。したがって推定総重量は24,570gで、この壁土は比重が約2、残存最大壁厚が約4cmであることから、壁面に換算すると約55.4cm四方の分量が柱穴の埋土内に混入したと想定できる。

分析はX線回折分析・蛍光X線分析・粒度分布分析・火山灰分析を行い、分析には主に上層の上塗りと、下層の荒壁から採取した微量サンプルを1点ずつ供した。なお粒度分布分析・火山灰分析には比較試料として遺構面より下層で確認した火山灰層も用いた。

#### 2 ) 分析方法とその結果

##### A ) 生物・実体顕微鏡観察 ( 図25 )

機器はNikon YF21・Nikon SMZ-2Bを用いた。透過観察で上塗りに火山ガラス、荒壁に淡水性珪藻・火山ガラスを認め、落射光観察で上塗り・荒壁ともに構成物の粒形が細かいことを確認した。

表3 柱穴出土の壁土重量表

出土遺構		壁土重量 (g)
建物3	柱穴134	3
建物3	柱穴149	29
建物4	柱穴130	121
建物4	柱穴136	71
建物4	柱穴138	2,348
建物4	柱穴142	591
建物4	柱穴143	34
建物4	柱穴144	222
建物4	柱穴145	180
建物4	柱穴147	6
建物4	柱穴150	514
建物4	柱穴151	1,222
建物4	柱穴152	4,144
建物4	柱穴153	213
建物4	柱穴164	1,732
建物4	柱穴192	664
建物5	柱穴162	4
建物8	柱穴123	85
建物8	柱穴159	32
建物8	柱穴210	70
合計		12,285

#### B) 蛍光X線分析(表4)

機器はHORIBA MASA500を用いた。機器の設定条件はX線管電圧15kV・電流300 $\mu$ A、測定時間600secで測定した。

Ca(カルシウム)は微量であり、Pb(鉛)も顕著なピークが認められなかったので、石灰・貝灰などの漆喰もしくは鉛由来の鉛白ではなくて、粘土などに由来する白土と考えられる。

希塩酸による反応テストでも発泡はなく上記の結果を支持している。Si(ケイ素)・Al(アルミニウム)・Ti(チタン)の無機物は粘土などに由来するものと考えられる。

#### C) X線回折分析(表4)

宮内庁正倉院事務所のフィリップス社製の機器で分析していただいた。宮内庁正倉院事務所成瀬正和氏には記して御礼申し上げます。

基本的構成は非晶質のものが主であり、結晶質のものはSiO<sub>2</sub>で、実体顕微鏡で観察された石英などに由来するものであろう。両者を比較するとブロード度は上塗りの方が強い。

#### D) 粒度分布分析(表5)

機器は掘場リサーチセンターでHORIBA-LA920を使用して分析した。

機器の設定条件は分散媒-イオン交換水・透過率-平均7%・相対屈折率-116a0001・循環速度-3・超音波-02:00(7)で測定した。

火山灰層は0.50~0.60 $\mu$ m、12~14 $\mu$ mと100~125 $\mu$ mにピークがある。0.50~0.60 $\mu$ mは粘土の粒径、12~14 $\mu$ mはシルトの粒径のもの、100~125 $\mu$ mは火山灰を主体とする細砂と考えられる。上塗りは火山灰層と比較するとシルト粒子の12~14 $\mu$ mのピークが少し粒径の大きい16~20 $\mu$ mへシフトし、細砂の100~125 $\mu$ mのピークが少し粒径の小さい70~80 $\mu$ mへシフトしている。荒壁はシルト粒子のピークが12~14 $\mu$ mであるが細砂のピークは平滑になりはっきりとは見られない。

上塗りは火山灰層に比べ粘土・シルト粒子が相対的に少なくなり、火山ガラスの粒径が全体的に小さくなったと考えられる。これは粘土・シルトのより粒径の細かいものが排除され、火山ガラスの粒径の細かいものが選択されたと考ええると、水簾など何らかの選別があると思われる。

荒壁はほとんどがシルト粒子で、メジアン径が上塗りは22.7 $\mu$ m、荒壁は14.7 $\mu$ mと荒壁が概して小さく、上塗りより細かい粒径のものを使用している可能性がある。

#### E) 火山灰分析(表6~8)

火山灰分析は、(株)京都フィッシュン・トラックにおいて全鉍物分析・重鉍物分析・火山ガラス形態分類・火山ガラスと斜方輝石の屈折率測定をした。その報告により述べる<sup>1)</sup>。

火山灰層は83%火山ガラスを含み、パブルウォール型が主で特徴的な亀の甲型ガラスが少量みられ、火山ガラス屈折率1.4976~1.5006で斜方輝石に屈折率から特徴的なフェローハイパーシオンを含むことから始良Tn火山灰(26000~29000年前<sup>2)</sup>)に比定される。

上塗りは、火山ガラスの割合が80%で火山ガラス屈折率1.4997~1.5019、斜方輝石に特徴的なフェローハイパーシオンを含むことから始良Tn火山灰と考えられる。上塗りの特徴としては、火山

ガラスの粒径が細かくバブルウォール型より軽石型が卓越し表面のひび割れと再発泡が見られ、褐色角閃石を含むことが上げられる。そのうち粒径とガラスの形態は水簸選別を示唆する可能性がある。さらに板状で透明性のあるバブルウォール型より失透感つまり白さが強調された軽石型が卓越することが始良Tn火山灰本来の構成とは異なることもそれを支持する。またひび割れ・再発泡・褐色角閃石の存在は600以上の被熱の痕跡を表わしている。

荒壁は長石・石英を主に含む砂質粘土で、火山ガラスを4.5%含有し、その中に始良Tn・K-Ah（アカホヤ）<sup>3)</sup>（7300年前）・大山系（20,000年前～22,000年以前）の3種類が確認された。また角閃石の大部分が褐色角閃石である。したがってこの粘土は7,300年前以降に堆積した沖積粘土であり、上塗り同様に被熱した経歴を持つことが判明した。

### （3）小 結

今回出土した壁土の上塗り層に火山灰が使用されていたことが明らかとなった。同様の例としては奈良県山田寺の報告書に壁土上塗り層「白土」に火山灰が用いられ、その火山灰は軽石型を主とする少なくとも数十万年より古い可能性が高いと報告されている。また同寺の第4次調査で白土採取跡と考えられた土壌SK345付近で採取された白い土が、同じく火山灰であることが確認され、上塗り「白土」の原料と推定されている<sup>4)</sup>。

今回は調査区内に土取り穴はないが、分析結果から見て下層の火山灰層を上塗りに使用していた可能性が高い。しかし火山灰の形態を見ると山田寺の場合は壁土の「白土」と地層から採取された白い土は、共に軽石型の火山ガラスが主であるが、今回の調査で出土した上塗りと火山灰層を比べると、上塗りは軽石型が主であるのに比べ火山灰層はバブルウォール型が主であるという違いがある。これは先に述べた理由と軽石型がバブルウォール型に比べ比重が小さいため水簸などの選別が働いた可能性が強い。いずれにしろ火山灰を壁土の上塗り層に用いるのは山田寺に次いで2例目で、この「わざ」が7世紀から平安時代まで伝承されたと想定できる。いわゆる上塗りの「白土」を何に求めるかという中で、火山灰が施工場所の近辺で入手できれば当然利用の選択肢の一つに入っていたと思われる。

京都市内出土の壁土の例で言えば、今回と時期に近い10世紀中頃の平安京内裏出土の壁土は、上塗りに粘土系の「白土」を用いていた。平安京右京六条一坊出土の鎌倉時代の壁土は上塗りの白壁だけが残存し漆喰系であった<sup>5)</sup>。

今回検出された始良Tn火山灰層は、東山・北山・西山に囲まれた京都盆地のなかのいろいろな場所で見つかっているが、多くは3～4万年前の扇状地がそれより古い地層の上の池・沼などの滞水している低湿地に堆積している。これまで遺跡で言えば、例えば岡崎の白河街区、四条以北の平安京右京、二条駅周辺の平安宮・平安京右京、丸太町七本松の平安宮造酒司などで確認されている。しかし遺跡の場合、始良火山灰層は「地山」面以下にあり、深い遺構か、深い断割りをしないと確認しにくく、今後、堆積層が確認される範囲が広がる可能性はある。火山灰は主に岡崎・平安京右京で確認されており、今回の調査地が右京五条三坊であることを考えると、壁土は

基本的には近辺で材料を調達し賄った可能性が高いと思われる。

註

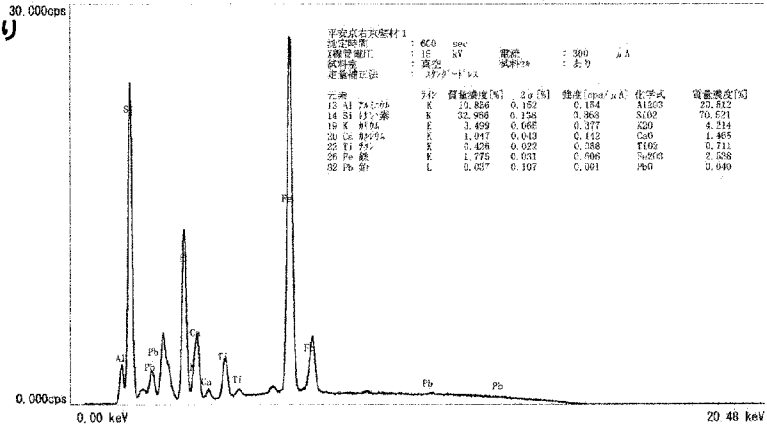
- 1) 「春日高辻 04HK-QP001 火山灰分析結果報告書」(株)京都フィッション・トラック
- 2) 町田 洋・新井房夫『新編・火山灰アトラス』 2003年
- 3) 註2に同じ
- 4) 『山田寺発掘調査報告』奈良文化財研究所学報第63冊 独立行政法人 文化財研究所 奈良文化財研究所 2002年  
村上 隆「山田寺の壁体に用いられた「白土」」『日本文化財科学会第18回大会研究発表要旨集』  
2001年
- 5) 『平安京右京六条一坊 - 平安時代前期邸宅跡の調査 - 』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第11冊  
(財)京都市埋蔵文化財研究所 1992年

参考文献

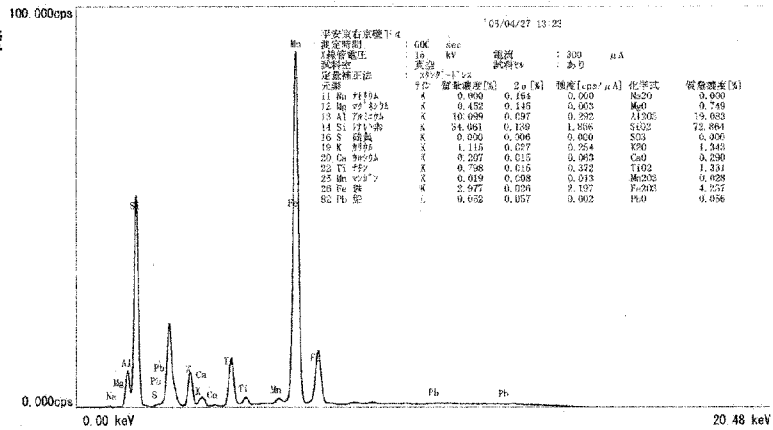
横山卓雄「京都盆地の自然環境」『平安京提要』(財)古代学協会・古代学研究所 1993年

表 4 蛍光X線・X線回折分析表

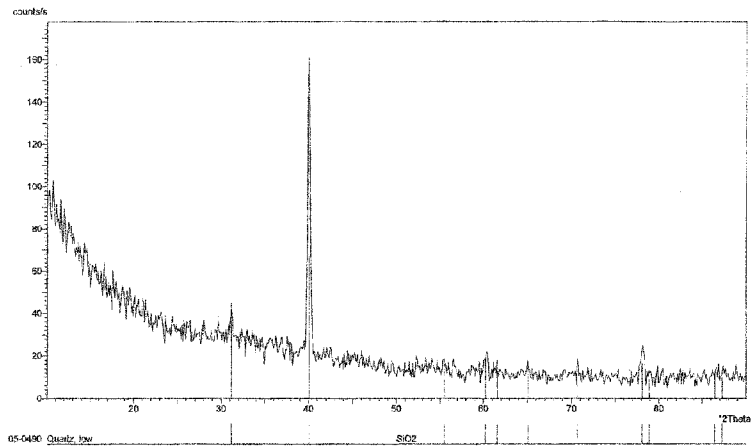
蛍光X線  
分析試料名：上塗り



蛍光X線  
分析試料名：荒壁



X線回折  
分析試料名：上塗り



X線回折  
分析試料名：荒壁

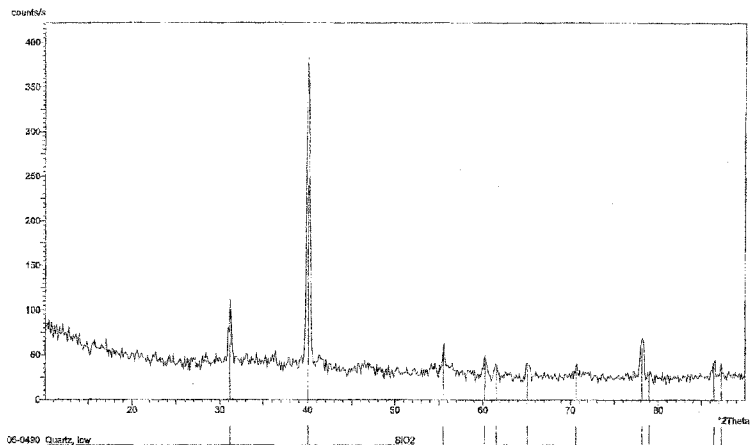
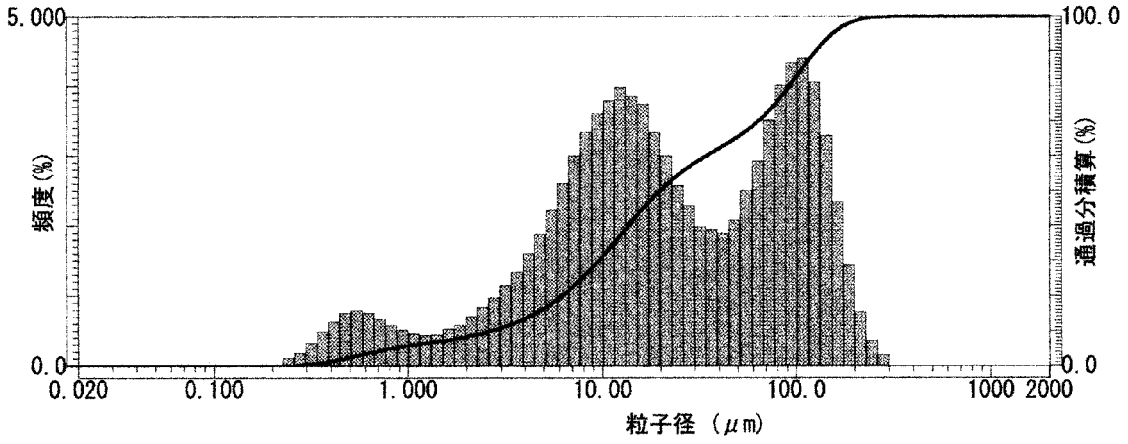
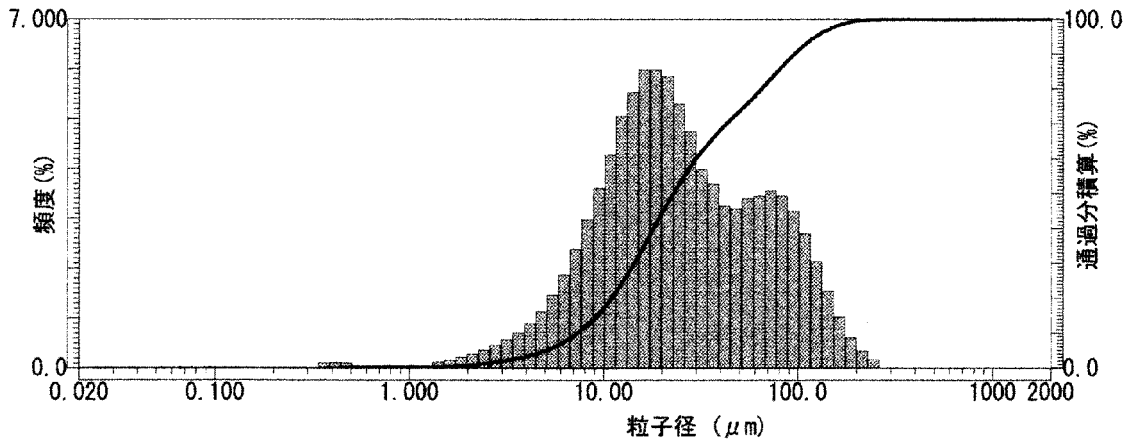


表5 粒度分布表

粒度分布 分析試料名：火山灰層



粒度分布 分析試料名：上塗り



粒度分布 分析試料名：荒壁

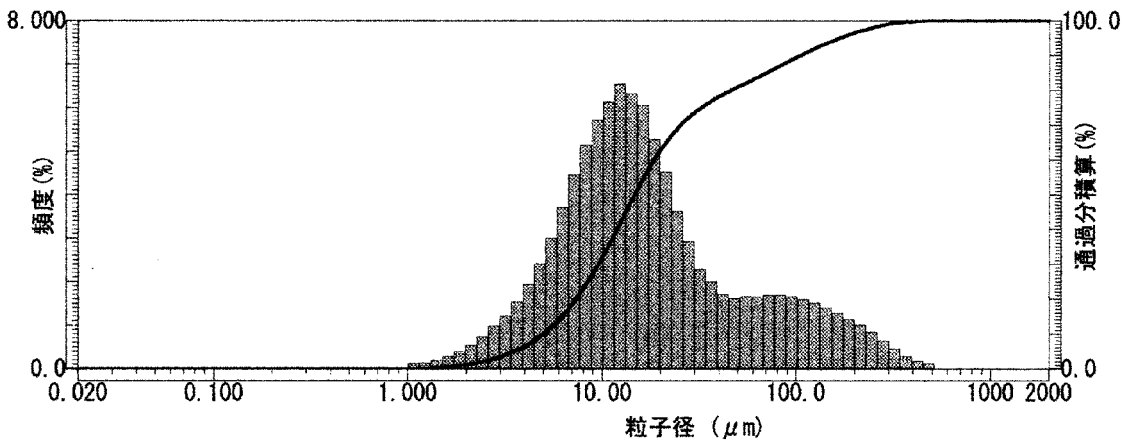




表6 火山灰分析結果表1

分析試料名：火山灰層

全 鋳 物 組 成

火山ガラス	軽鋳物	重鋳物	岩片	その他	合計	備 考
166	25	1	6	2	200	火山gl:珪長質無色透明bw>pm型。純層に近いATテフラ。 軽鋳物:pl,Qz。重鋳物:GHb,Opq,Opx,Cpx。 岩片:gl質で火砕物,石英質堆積物起源混在。 その他:風化粒子。
83.0	12.5	0.5	3.0	1.0	100.0	

bw:バブルウォール、pm:軽石、sco:スコリア、pl:斜長石、Qz:石英、Kf:カリ長石、chal:カルセドニー

重 鋳 物 分 析

Ol	Pyroxene		Amphibole		Opq	Cum	Zr	Bt	Ap	total	備 考
	Opx	Cpx	BHb	GHb							
-	13	3	-	20	17	-	-	-	-	53	
0.0	24.5	5.7	0.0	37.7	32.1	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0	

Ol:カンラン石、Opx,Cpx:斜方、単斜輝石、BHb,GHb:緑色・褐色角閃石、Opq:不透明鋳物、

Cum:カミンクトン閃石、Zr:ジルコン、Bt:黒雲母、Ap:アパタイト

火山ガラス形態分類

Ha	Hb	Ca	Cb	Ta	Tb	It	合計	色付gl	備 考
66	75	9	8	2	36	4	200	+	珪長質bw>pm型。 水和層厚≒10μm。 淡褐着色gl,亀ノ甲glを少量含む。
33.0	37.5	4.5	4.0	1.0	18.0	2.0	100.0		

H:扁平、C:中間型、T:多孔質、It:不規則型、incl:インクルージョン、devt:失透化、Rl:屈折率

火山ガラス屈折率測定

屈折率範囲 (range)		屈折率 平均値 (mean)	測 定 個体数 (個)	屈折率最頻値 (mode)	火山ガラス形態 (glass type)
最小	最大				
1.4976	1.5006	1.4994	75	1.500	H,T,C,It,

表7 火山灰分析結果表2

分析試料名：上塗り

全 鉱 物 組 成

火山 ガラス	軽 鉱物	重 鉱物	岩片	その 他	合計	備 考
160	27	1	5	7	200	火山gl: 無色透明珪長質pm>bw型gl。かなりコンタミした被熱AT テフラ。軽鉱物: pl, Qz。重鉱物: 微量のOpq, Bt, GHb, BHb, Cpx, Zr。 岩 片: 砂質で堆積岩起源のものが主。 その他: 火山Jglの変質物・風化粒子。
80.0	13.5	0.5	2.5	3.5	100.0	

bw: パブルウォール, pm: 軽石, sco.: スコリア, pl: 斜長石, Qz: 石英, Kf: カリ長石, chal: カルセドニー

重 鉱 物 分 析

Ol	Pyroxene		Amphibole		Opq	Cum	Zr	Bt	Ap	total	備 考
	Opx	Cpx	BHb	GHb							
-	5	1	4	7	10	-	1	9	-	37	
0.0	13.5	2.7	10.8	18.9	27.0	0.0	2.7	24.3	0.0	100.0	

Ol: カンラン石, Opx, Cpx: 斜方、単斜輝石、BHb, GHb: 緑色・褐色角閃石、Opq: 不透明鉱物、  
Cum: カミングトン閃石、Zr: ツルコン、Bt: 黒雲母、Ap: アハタイト

火山ガラス形態分類

Ha	Hb	Ca	Cb	Ta	Tb	It	合計	色付gl	備 考
10	55	33	11	19	71	1	200	-	珪長質pm>bw型。 約50%のglにヒ割れ、約10%に再発泡 あり。水和層厚≒4~5μm。
5.0	27.5	16.5	5.5	9.5	35.5	0.5	100.0		

H: 扁平、C: 中間型、T: 多孔質、It: 不規則型、incl: インクルージョン、devt: 失透化、Rl: 屈折率

火山ガラス屈折率測定

屈折率範囲 (range)		屈折率 平均値 (mean)	測 定 個体数 (個)	屈折率最頻値 (mode)	火山ガラス形態 (glass type)
最小	最大				
1.4997	1.5019	1.5008	75	1.501	T, H, C, It,

鉱物の屈折率測定

屈折率範囲 (range)		屈折率 平均値 (mean)	測 定 個体数 (個)	屈折率最頻値 (mode)	鉱物の種類 Opx
最小	最大				
1.703	1.707	1.706	14	1.706	ハイパーシソー大山系 ハイパーシソーAT? フェロハイパーシソーAT特有
1.704	1.719	1.717	17	1.717	
1.731	1.735	1.732	11	1.732-1.733	

斜方輝石: 劈開片上での最大屈折率 $n_2 \approx \gamma$ 、角閃石 $n_2 (\beta < n_1 < \gamma)$ 、  
斜長石: 劈開片上での最小屈折率 $n_1 (\alpha < n_1 < \beta)$

表 8 火山灰分析結果表 3

分析試料名：荒壁

全 鉱 物 組 成

火山 ガラス	軽 鉱物	重 鉱物	岩片	その 他	合計	備 考
9	112	4	66	9	200	火山gl: 珪長質薄手bw型主。K-Ah, AT, 大山系glが混入した被熱土壌。軽鉱物: pl, Kf主。 重鉱物: BHb, Opq, Opx主。Cpx, GHb, Zr, Ap含む。 岩片: 石英質で堆積物起源。その他: 風化粒子・フラント・オパール。
4.5	56.0	2.0	33.0	4.5	100.0	

bw: パブルウォール、pm: 軽石、sco.: スコリア、pl: 斜長石、Qz: 石英、Kf: カリ長石、chal: カルセドニー

重 鉱 物 分 析

Ol	Pyroxene		Amphibole		Opq	Cum	Zr	Bt	Ap	total	備 考
	Opx	Cpx	BHb	GHb							
-	10	3	81	2	26	-	2	5	2	131	ザクロ石含む Hbの大部分が褐色Hbで特異
0.0	7.6	2.3	61.8	1.5	19.8	0.0	1.5	3.8	1.5	100.0	

Ol: カンラン石、Opx, Cpx: 斜方、単斜輝石、BHb, GHb: 緑色・褐色角閃石、Opq: 不透明鉱物、Cum: カミンクトン閃石、Zr: シルコン、Bt: 黒雲母、Ap: アパタイト

火山ガラス形態分類

Ha	Hb	Ca	Cb	Ta	Tb	It	合計	色付gl	備 考
46	105	18	12	4	13	2	200	+	珪長質bw>pm型。 やや部厚いglに比べ割れや再発泡が観察される。
23.0	52.5	9.0	6.0	2.0	6.5	1.0	100.0		

H: 扁平、C: 中間型、T: 多孔質、It: 不規則型、incl: インクルージョン、devt: 失透化、RI: 屈折率

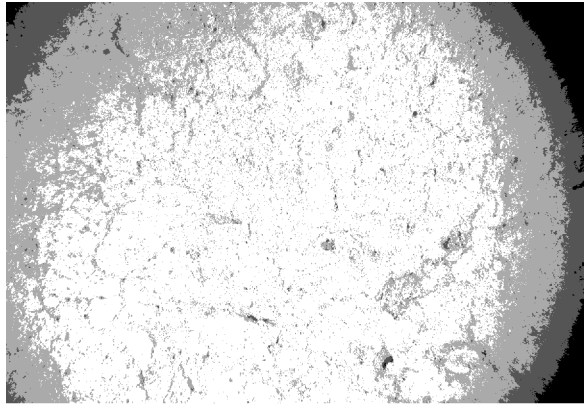
火山ガラス屈折率測定

屈折率範囲 (range)		屈折率 平均値 (mean)	測 定 個体数 (個)	屈折率最頻値 (mode)	火山ガラス形態 (glass type)
最小	最大				
1.4986	1.5010	1.5000	15	1.500	H, C, T, ← AT
1.5026	1.5036	1.5031	2	-	T, C, It, ← 大山系
1.5091	1.5119	1.5104	30	1.511	H, C, T, ← K-Ah

鉱物の屈折率測定

屈折率範囲 (range)		屈折率 平均値 (mean)	測 定 個体数 (個)	屈折率最頻値 (mode)	鉱物の種類
最小	最大				
					測定対象外

斜方輝石: 劈開片上での最大屈折率 $n_2 \cong \gamma$ 、角閃石 $n_2 (\beta < n_1 < \gamma)$ 、  
斜長石: 劈開片上での最小屈折率 $n_1 (\alpha < n_1 < \beta)$



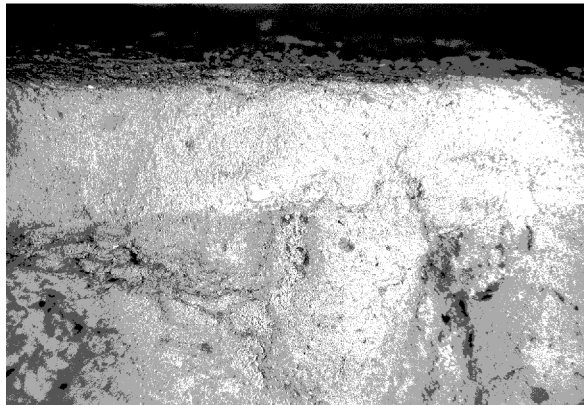
壁土表面

約×3.8



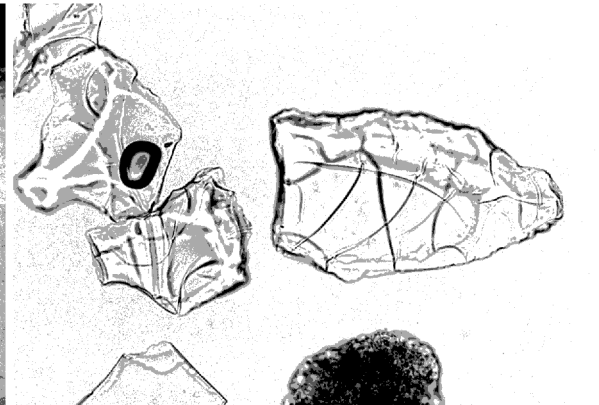
火山灰層

×100



壁土断面

約×3.8



上塗り部 ひび割れガラス

×200



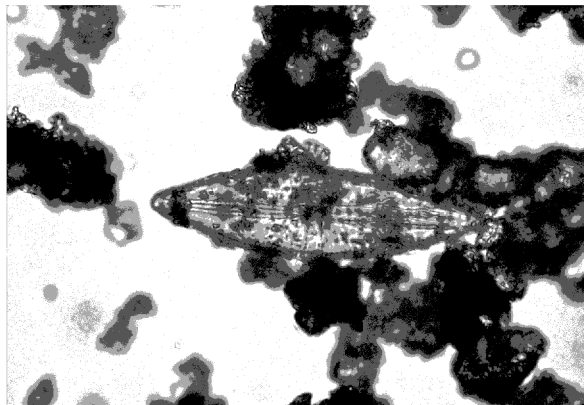
壁土内スサ

約×3.8



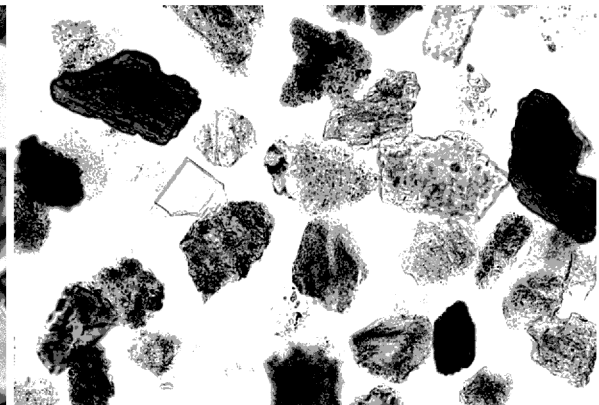
上塗り部 発泡ガラス

×200



珪藻

約×228



荒壁 褐色角閃石

×100

図25 壁土・火山灰顕微鏡写真

# 圖 版

# 報 告 書 抄 録

ふりがな	へいあんきょううきょうごじょうさんぼうさんちょうあと							
書名	平安京右京五条三坊三町跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2005-2							
編著者名	東 洋一・小森俊寛・北野信彦・竜子正彦							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2005年6月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきょううきょう 平安京右京 ごじょうさんぼうさんちょうあと 五条三坊三町跡  さいいんいせき 西院遺跡	きょうとしうきょうく 京都市右京区 さいいんやがけちょう 西院矢掛町  16・17番	26100	930	34度 59分 50秒	135度 43分 57秒	2005年3月 11日～2005 年4月28日	494m <sup>2</sup>	マンション 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
西院遺跡	集落跡	弥生時代		石器				
平安京右京 五条三坊三町跡	都城跡	9世紀初頭 ～10世紀前半	建物・埋納遺構・ 溝	土師器・須恵器・緑釉 陶器・灰釉陶器・黒色 土器・白磁・青磁・瓦 ・壁土・水晶・基石		柱抜き取り穴に壁 土が多量に埋まっ ていた建物を検出。		
		10世紀前半以降	耕作溝					

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2005-2

## 平安京右京五条三坊三町跡

発行日 2005年6月30日

編集発行 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1  
〒602-8435 075-415-0521  
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地  
〒604-0093 075-256-0961